

---

超リアルロボットストーリー 超機動要塞ガギゲゴS . O . B .

R C

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

超リアルロボットストーリー 超機動要塞ガギゲゴS・O・B・

### 【Nコード】

N9797D

### 【作者名】

RC

### 【あらすじ】

ガギゲゴシリーズ第3作目。超機動要塞ガギゲゴS・O・B・（ストーリー・オブ・ビギニング）時は遙か昔、超古代文明の時代。戦いは、どのような経緯で始まったのか。すべての謎が明かされる。なお、この作品は外伝に似たものになっていまして、仮にこれを読まなかったとしても、問題なく次作品（GtOG）へ移ることができます。つまり、とばすことができるということです。

## 第一話 時を越えて

「おかしいな…」

ドツペルゲンガーは書類を見つめながら呟いた。彼の隣には、先日の任務でゴッド・ガギグゲゴから奇跡の生還を果たした次郎がいた。

「何がですか？」

「この数字を見てくれ。」

そい言つと、ドツペルゲンガーは書類を差し出す。それにはややこしい計算式が書いてあったが、次郎にはさっぱり分からなかった。「お前はゴッド・ガギグゲゴに乗り、あの光を発生させたにもかかわらず…今生きているよな？」

「…違つていたら僕が幽霊じゃないですか。」

「そうか…。いやな、あの時のデータを元にだいたいシミュレーションをやってみたのだが…どうも、矛盾しているんだ。」

「矛盾つて？」

「それが…吸い取られる生命エネルギーを計算しても、次郎以外の普通の人間でもゴッド・ガギグゲゴで死ぬはずがない、つてデータがだな…」

ドツペルゲンガーの言葉を聞き、次郎はきよとんとした。

「あなたねえ…じゃあ、セロファンはサイエンサーと戦ったときに死んでいなかった、とでもいうんですか？」

「そうとしか思えない。そうだろ？」

「…博士、精神科をオススメします。」

「ば、馬鹿にすんな！俺の計算が正しくないと言いたいのか！？」

「それもあります。でも、もし正確な数値だったとしても、そこそ矛盾しますよ。」

次郎は書類を置き、呆れたように尋ねた。

「では博士。もしセロファンが生きていたとしたら、どうやってレ

イクは甦ったのですか？」

「…それはその…」

「もし彼の甦りが、イットリウマンの言っていたのとは別の原理、それこそ偶然で起こったとしても、それでもセロファンは死んだのです。なにしろ、『死体』という動かぬ証拠がありますからね。当時のセロファンは、アメシストによる管理のため健康状態は良好、不老不死の体ゆえに老衰等による突然死はありえない。つまり、ゴッド・ガギグゲゴ以外の原因で死ぬはずがないのです。これでも…博士はその学説を唱えるのですか？」

「はあ…。」

「『僕が特別すぎる』と自慢しているわけではありませんが、ゴッド・ガギグゲゴのあの機能は、常人なら確実に死なせます。』それつきり博士は口を開かなかった。

「ま、本当に正しい事はセロファン自身しか知りませんね。」

真実を確かめるべく、話は超機動要塞ガギグゲゴS・O・A・第十二話の中編へとさかのぼる。

「次郎…セロファンは？」

元悪党の最後を見届けた次郎は、彼の状態を問うたドッペルゲンガーに対し、暗くうつむいた。

「そうか…残念だったな…。」

「…遺体はどうしますか？」

「ひとまず大佐に連絡を取って、処理班を呼ぼう。それと、ゴッド・ガギグゲゴを使ったせいとか、この辺の電磁波がやけに大きい。できるだけ離れていた方が安全だ。」

「…分かりました。」

次郎とドッペルゲンガーは、セロファンを乗せたガギグゲゴを残し、市役所へと移動した。

「フツ…あの小僧を演技で騙す事など、朝飯前だ。」

それから1分も経たない内に機体のコックピットから出てきたのは、紛れもなくセロファン・フリーザンだった。

（さすがにこの年では、いくら健康だといっても精神的につらいなだが、そんなゴッド・ガギゲゴの小さなコスト、アメシストという悪魔の鉄檻から脱出できると思えば安いものだ。それに、こんなチャンスは滅多にない。私は…簡単に欲望を捨てきれようなちっぽけな人間ではないのだよ。）

セロファンは立ち上がり、ガギゲゴから地面へと降りた。だが、その瞬間であった。

「な、なんだ…うわっ！」

まるで妄想によって生まれた仮想空間のように、空に穴が開いたのだ。穴の中は闇、黒い光がもれている。そして空洞は、竜巻のごとくその場にある空気をかき回し、物体を吸い込んでいたのであった。

「くっ…くそ…！」

ガギゲゴの超音波のせいでもあってか、辺りに人間の姿はなく、セロファンのみがガレキと共にその穴へ吸い寄せられていく。彼はすかさず手を地面へと差し伸べるが、すでに距離は開いてしまった。とうとうセロファンは、得体の知れない空間へと引きずりこまれてしまったのだ。

「何なんだ、ここは…」

空間の中は塵ばかりで、彼ぐらいの大きな物体はほとんど無かった。セロファンはその中で、浮遊しながら流れに乗っていた。

「…いつかは光のある場所へ辿りつけばいいがな。それまでは、死に直面しない事を祈ろう。」

超古代文明とサイエンサー対アメシストという裏世界を生きたセロファンにとっては、このような摩訶不思議な状況はつき物だと思

っていた。だが、今回はかりはあまりにも違っていた。

「あ、あれは…光だ。」

セロファンは言葉の通り、目の前にわずかながら光の点を確認した。光は近づいてきているらしく、だんだんと大きくなっていく。

「どこに出られるかは分からないが、ここに居たくは無いです。」

流れに乗りながらしばらくすると、光はセロファンと同等の大きさになった。彼は一か八かでその光に飛び込んだ。

「うわあああ…」

入ったときと同じく、穴は開いた空間に通じていた。それも上空にあつたという事まで同じ。彼は地面とぶつかり、尻餅をついた。

「う…一体ここは何処なんだ…？いや、もしかここは…」

見たところ、その場所は研究所の中のようなだった。先ほど上空だった空間は、実は高い天井があるこの部屋の中だ。機械が立ち並んでいる。

（…この機械は文明の結晶、つまりおそらくは2000Xのものだ。だから…何かの原因で場所だけを移動したのか？）

何がなんだか分からなかったが、彼はひとまずこの研究所から出る事にした。明らかに見覚えの無い場所だったため、ばったり建物にいる人間とはちあわせるのを避けたかったからだ。そして彼は屋外へ出た。ビルが立ち並んでいて、ついさっきまでいた某都市とあまり変わりはない。

（やはり場所だけが変わったようだな…とにかく、早いところ特定できるものを探そう。）

セロファンは、とりあえずは研究所の周辺を歩き始めた。彼は景色を眺めながら、何かを感じていた。

（さっきの研究所といい、この風景といい…なんだ…どこかで…見

た覚えが…)

その時、彼は驚くべき物を目にした。それは、建物に書かれたある文字であった。

セロファン・フリーザン研究所

(こ、これは…まさか…)

この文字は、かつてセロファンが使用していた紛れもない本物の研究所のプレートだった。

(そんな…これはザ・ブレイカー設立後に破壊したはずだ。なぜそれがここに…いや待てよ。もしかしたらここは…)

この時こそ、200X年よりはるか昔、セロファン・フリーザンが生まれ育った時代、そして場所であった。つまり、超古代文明の時代なのだ。

「嘘だ…嘘だ…こんな事が…」

パニック状態に陥るセロファンを馬鹿にするかのように、物陰から一人の青年が覗いていた。

「…なんだ君は…ここはなんなんだ!？」

「何って…ここ、僕の研究所なんだけど。」

## 第二話 あ頃はよかった

「君の？じゃあ、君はもしや…」

「僕はセロファン。科学者のセロファン・フリーザンさ。」

この言葉を聞き、彼はなんともいえない気分になった。

（この青年が…私なのか？たしかに、誰かに似ているとは思っていたが…いや、ともかく、そんな事より重要な事実がある。私は…超古代文明へとタイムスリップしてしまったのだ。）

「それにしてもあんた、この辺では見かけない服装だね。」

「…それがだな…」

セロファンはまだあまり理解していない。すると、自分と同じ名を語る青年は、突然興奮しながら言い出した。

「も、もしかして…時空を越えてやってきた？」

「え？」

青年はセロファンの答えも聞かず、全力疾走で研究所内へと移動した。

「あああ、駄目か…」

セロファンが着いて行くと、先ほど彼がいた機械の前で青年はうつむいていた。

「ねえ、お爺さん…あんた、この機械の近くから出てきた？」

「…あ、ああ。おかげで今でも不思議な気分だ。」

「その時…他に何か物が落ちてこなかった？」

セロファンは首を振った。

「…計画失敗だ。」

彼はこの青年の姿を見て、なにかを思い出した。

（そうか…あの時だ。若かった私は世界征服という夢に目覚めてから、どうにかしてその方法を見つけようと必死に努力していた。その一つが、これだった。）

その時の彼の考えは、こうだった。

まず、次元を操作する方法を考え、それを可能にする機械を作成する。機械には自分の小遣いで買ったためいっぱいのエネルギー（電源）を流し、空間を歪め、その結果異次元を発生させるのだ。

（これが上手く言った暁には、世界全体に巨大な異次元の穴を発生させ、全人類を別の世界へと飛ばすはずだった。だが、実験の結果からすれば失敗。できる穴が小さすぎた。今の自分ではこれ以上のエネルギーを手に入れるのは不可能ということで、この方法は諦めた。）

「もし僕の理論が正しいのなら、穴の大きさに合わせて、空間に漂っていたものも落ちてくるはずだ。でも、あんた一人しか来なかった。ああ…金の無駄遣いだったな。」

青年は怒りながら言った。

「出て行ってくれ…あんたに用は無くなったんだ！」

「まったく…とんでもない世界にやってきたものだ。」

ゼロファンは街の中で腰を掛けていた。用意もなしに突然ここにやってきたため、居場所がないという事は言うまでもない。

「今も昔も、私の考える事は同じだった。人の心は風のように変わりやすい、とは言うが…捨てきれない野望だつてある。現代人には、この『夢を諦めない』という思考が足りないのだ。」

ぶつぶつと彼は独り言を呟いた。

「そして、たしか今から4年後…私は努力の末、夢をかなえる方法を見つけ出した。それこそ…奇跡を信じた結果だ。」

既にこの時彼は、なぜ今に至るのかだいたいの見当がついていた。

（ゴッド・ガギグゲゴの射威認虞・紅羅ツ写亞は、サイエンサーをなにもかも消滅させると共に、その物体が占めていた空間がなくな

るのを防ぐために、同時に『新たな空間をはめ込む』という作業をする。どうにかして失敗を成功へと結びつけようとする私だからこそ思いついた、さっきの実験の応用だ。これが上手くいくはずだったのだが…)

セロファンは半分後悔しながら考えた。この半分というのは、この世界も悪くは無い、という感情もあつたからだ。

(数千年も経つてからテストもせずに発射したため、うまく作動しなかった。消えた空間と創られた空間がうまく合わず、ズレが生じたのだ。それによって空間が一時的に崩れ、時空にも乱れが生じた。そして出来たのが、あの不気味な空間だった。私の考えとしては、あの空間には穴が開いた回数だけ穴が存在する。200X年の某都市、機械が動いていた時の私の研究所、それぞれに通じている。もし、もう一度あの空間へ行く事ができたなら…私は帰ることが出来る。)

しかし、それは不可能に近い望みだった。  
(無理だ…エネルギーがないせいで研究所の機械を再度動かす事はできない。他に空間を歪ませる方法はなし…戻る方法はないものか…。)

そうは思うセロファンだったが、さっきも述べたようにこの世界で再び人生を送るのも気に食わないわけではなかった。過去を思い出しても、決して住みにくくはない。むしろ現在の某都市より快適なはずだ。

(そうか、未来を変えるのはややこしい事になるからよすにしても…ここで世界征服を進める私を手伝うのも、それはそれとしていい生き方だ。あと150年もすれば、ガギグゲゴの開発だってあるんだ。…ん？ガギグゲゴ？…ああ、あの手があつた!!)

セロファンは方法を思いついた。

(このまま生きて、もう一人の私がゴッド・ガギグゲゴを開発すれば、それを使って未来へ帰ることが出来るはずだ!)

セロファンは、心の底から光が差し込めてくるのを感じたのであ

った。

「またあんたか。さっき言ったことを忘れたのか？」

計画を建てたゼロファンは、再び研究所へ来ていた。

「私は時空を越えてやってきたのだ。元の世界に帰る権利があるはずだ。」

「状況を分かってんの？機械が動かなきゃどうしようもない。」

「別に機械を使えとは言っていないだろ。」

「じゃあ、どうするんだい？」

ゼロファンは答えた。

「ただ一つ、私にまともな生活をさせてくれればいいんだ。」

「なんだって？生活費を分けてくれ、と言っているのか？」

「そんなところだ。これを受けてくれるのなら、手伝いだってなんでもやろう。」

「爺さん、あんた言っている事が無茶苦茶だよ。普通に生きると元に戻るのかい？そんな簡単な話……」

そこで年長のゼロファンは年少のゼロファンを静止し、こう言った。

「すべては…結果なのだよ。」

「…あ、あんた、その言葉は……」

「君の口癖だろ？」

「なんで知っているんだ？」

「君の事はなんでも知っているさ。生年月日、年齢、出身地、この研究所を建てた理由、なにもかもだ。一つ教えてやるが、君の夢は当分叶いそうに無い。」

「僕の欲しているものを侮辱するなら、出て行ってくれ。」

「待て待て、これは単なる助言だ。正しいとは限らない。大事なものは、ひたすら夢を追い続ける事だ。そうだろ？」

自分の考えている事をピッタリと言い当てる男を、青年は少々気持ち悪く思った。そして結論を出す。

「…分かったよ。寝泊りぐらいはさせてやる。だが、これだけは言っておく。」

青年は断定するようにはっきりと言った。

「僕にする事に口出しはするな。」

「ああ、しないとも。私は人生がほしただけだ。」

「人生？」

「今は詳しく言えないが、後になるときつと分かるはずだ。」

「…勝手にしてくれ。」

話が済み青年は場所を移動しようとしたが、ふと何かを思いついた。

「そういえば、名前聞いていなかったな。なんて言うんだ？」

「私の名は…バンクーバ・ハンバーガー。響きが気に入ったら偽名にでも使ってくれ。」

### 第三話 セロファンのおつかい

「物質？」

セロファンが過去の自分の下で生活し始めてから1週間もせずに、その仕事はやってきた。

「100km先の町だ。ちょうど交通の便がよくない場所だけど、それぐらい歩けるだろ？」

青年は白衣を着ながら説明する。

「必要なだよ、夢のために。」

「そうか…」

「別に、生活させてやってんだからそれなりに利用しよう、って事じゃないよ。理由は分かりきってるんじゃないの？」

「地球征服のために、人間を大量に殺せる有害物質を開発する、だる？」

「さすがご名答。」

彼はセロファンに紙切れを渡す。

「手に入れるものはこれに書いてあるか。じゃ、さっさと行ってきてくれ。」

「まったく、人使いの荒いやつだ。」

青年から言われたとおり、セロファンは言われた物質が手に入る町に向かっていた。彼の言っていた通り、他の道には今で言う『車』がわんさか通っているのだが、その町へとつながる一本道には一台もない。聞いた話では、例の町の首長は環境保護を訴えていて、その一環として町へ通じる道をこっぴりやっつて『車両通行禁止区域』とかにしているらしい。

「仕方がない、彼は私なのだ。早めに行ってしまうおう。」  
セロファンはひたすら歩いた。

ちょうどその頃、セロファン研究所では。

「よく働いてくれるよ、あの老人は。」

セロファン・フリーザン青年は独り言を呟いた。そして彼は、研究所の機械の一つを操作し、モニターをつけた。そのモニターには、布で顔を隠した何者かが映っていた。

「久しぶりだな、セロファン。」

「やあ。」

「何か報告でもあるのか？」

セロファンは言った。

「数日前から、ある男をこの計画に引き入れた。その男を、監視してもらいたい。」

「監視？お安い御用だ。」

どうやらその人物は、中年ぐらいの男らしい。

「この僕の夢を台無しにされちゃ困るんだ。だから、僕の最初で最高の部下である君に…この命令をしているんだ。…頼むよ、ヴィフアリアス。」

「今日はここまでか…」

その時、日は暮れかけていた。一日中歩いたおかげで、3分の1程度は進んだであろう。しかし、青年の行っていた町までの距離が正確だとは思っていない。

「厄介な町だな。いくらエネルギーを無駄にしないとはいっても、電灯ぐらい建ててもらいたいものだ。」

セロファンは日没の前に、宿泊する『ホテル』なるものを探しに、再び歩いていった。

「お客様、御用がありましたらいつでもお申しつけてください。」  
ホテルの人間はそう言い、部屋を出て行く。

「ふう… やつと腰を下せる。」

セロファンはベッドに腰掛け、荷物を置いた。

「どうせ物資を手に入れても、この時代の私は4年経たなければ結果が出ない。無駄の一言だ。自分で言うのも変だが、よくもまあこんな事をしようこりもなく考えたものだ。成功する確率も求めずに…」

そして彼はふと、あることを思いついた。

「… 未来を変えることはできないものなのか？」

セロファンは自問自答する。

「いや、だめだ… 厄介な事になってしまう。場合によっては、今の私の存在が無くなる。人生というのはそういうものだ。全てが、運命に乗って進んでいく。何をするにも、偶然の重なりなのだ。故にそれを乱せば… まずいことになる。だから…」

その時であった。

(… なんだ、この感覚は…)

セロファンは目に見えないなにかを感じ取ったのだった。

(… 誰かに… 監視されている?)

彼は自分の感覚に従うがままに、部屋を探索し始めた。何の変哲もない。彼は部屋を出て、廊下を眺める。しかしまた、特に誰かが覗いているなどの変わった点はなさそうだ。だがこの文明だ。隠しカメラに似たものがあってもおかしくはない。

(気のせいか… まあいい、いざとなったら策があるさ。)

セロファンは室内へと戻った。

翌朝。ホテル内のある部屋から一人の男が出てきた。布をまとい表情を隠している男は、ある部屋の前へ来た。しかし、少し間をおいてから彼はがっくりとする。

「老人め… なめたまねを…」

それから5分もしないうちに、彼はホテルを発った。

「上手くいってればよいがな…フツ…。」

一人セロファンは、目的地へと続く一本道を歩いていた。

「たしかに、私は何者かに監視されていた。もちろん証拠なんてない。長年の勘だ。」

独り言を言いながら彼は歩き続ける。

「決して防犯対策が進んではいなかった時代：鍵を成型して勝手に別の部屋に移ることなど、たやすいものだ。」

その時、セロファンは突然足を止めた。彼は誰かに言った。

「…一体、どこのどいつなんだ？」

その声に反応したのか、セロファンの後方で物音がした。事実、彼の後ろ歩いていた一人の男が同じく立ち止まったのである。

「どこまでついてくる気だ？」

「……」

「自己紹介をしないのなら、こちらから見せてもらおう。」

セロファンは振り向く。しかし、その人物の姿は彼の心を大きく動揺させた。それは…。

（き、貴様はまさか…ヴィファリアスなのか…）

セロファンとその男の出会いは、この時から2年ほど前のことだった。

「ん、なんだこれは？」

セロファンの元へ、一通の手紙が届いた。差出人は不明だ。それにはこう書かれていた。

偉大なるセロファン・フリーザンへ。私はあなたの存在を知っている。あなたは、夢を現実へと変えられる優れた人物だ。そこで一つ、お頼み申し上げます。私をあなたのその『計画』とやらに参加させてほしい。給料なんてものは必要ない。ただ、あなたが夢を成し遂げるのを手伝いたいだけだ。返事に期待している。

「一体：誰なんだ、こんなこと考えているのは…。いや：でも、悪くは無いな…」

実を言つとその頃の彼は、今の自分だけでは理想に近づかない、という事実を少しづつ自覚していた。もちろん、決断はすぐに下された。セロファンは男を受け入れたのだ。

その男の名は『ヴィファリアス』といった。その他の情報は決して教えてはくれなかった。むろん、その名でさえ偽名の可能性が高い。彼は、セロファンの初めての部下であり、最も信頼のおける部下になっていったのだ。

(そうか…こいつが…)

セロファンが彼を確認して、一瞬悲しい過去を思い出した。

(ヴィファリアス…おまえはいい部下だった。裏切った事なんて一度も無い。だからこそ…洪水計画で私と共に生き残る『一人』に選んだのだ。だが…私が一度死んだ後、神との契約ですぐに現実世界へ戻ってきた時には…もう一度見れると思っていたおまえの姿は無かった…。)

## 第四話 運命を変える

(あれから…お前に会うことは二度と無かった…おそらくは…クツ…)

あふれる感情を抑えながら、セロファンは言った。

「…私を監視するのは構わない。しかし…監視される側のなんともいえない嫌な気分を、よく考えておくんだな。」

その時、何を思ったのか、ヴィファリアスはセロファンの目に入る場所からいなくなっていた。

「思わぬ人物に会ったな…」

セロファンは呟いた。気配さえ感じないものの、常識的に考えると今もヴィファリアスが彼を監視していることは間違いないだろう。「しかし、気をつけなければ…感情を表に出すと、面倒な事になる。」

そういうのも、彼は自分がセロファン青年に『私は未来の君自身だ。』ということを知られたくなかったのだ。それは、今の現状を保つために仕方がないことだった。

(もし、仮に私の正体がばれたら…やつは私を拷問にかけることだろう。そして質問をし続ける。『夢は叶ったのか、世界征服は現実のものになったのか。』と…自分というものを形成するため、時間を無駄にしないためと考えれば、私がしてもおかしくはない。この世界の技術を使えば、ほぼ強制的に言葉を吐かせる事なんて簡単な事だ。そして、もし真実を言ってしまったら…やつは行動を止めてしまう。結果が分かっているものには努力をしない主義だからな。暁には…今のこの私が存在しなくなってしまう。)

以前、冗談半分で『夢は当分は叶わないだろう』といった事實は、セロファンにとって少々後悔すべき点であった。

「敵は二人…どうにかして正体を隠し続けよう。」

「ここは、とある街中の市場である。発達した文明、とはいえども、200X年の同じものとは異なっており、原始的である。」

「これを全てそろえろ、つてのか…」

そこにいたのは、言うまでも無くセロファン・フリーザーであった。彼が数日前、過去の自分から受け取った紙には、ずらりと文字が並んでいる。

説明が遅れたが、この地域一帯で使われている言語は、今も昔も『日本語』だ。だからこそ、セロファンは数千年さかのぼったこの世界でも、言葉が通じ合った。理由としては、ここが後の『日本』であり、その場所で古くから使われていた言葉が、近代に『日本語』となったからであろう。

「だいぶ多いな…いや待てよ、これは…」

だが、セロファンは紙に書かれているものを見て、啞然としていた。「なんてこった…。これは…洪水計画で使った…化合物Xの材料じゃないか…!」

「どうしてだ…まずいことになったな…。」

彼の言葉の通り、それはアメシストによって『セロファンウム』と名付けられる事になるだろう、あの物質を製作するのに必要なものが、欠けることなく丸々書かれていたのだ。

「…もし、このままこれを手に入れてあいつの元へ持っていったとすれば…」

結果、時空（運命）が乱れ自分自身が消滅してしまう、という最悪の結末を想像してしまうセロファン。

（…やつは、『有害物質の開発』をしようと、ただ無造作にこのいくつかの物質を選んだのだろう。しかし、もし偶然、目的の物質ではなく、『化合物X』ができたとしたら…運命は変わり、後の祭りだ。

では…)

セロファンは思わず言葉に出す。

「私に…運命を変えろという事か？」

それは、自分の夢を自分でさえぎるといふ事なので、彼にとって皮肉に感じた。だが、背に腹は変えられぬ、彼は行動に移したのだ。物陰から除く、一人の男に目を盗みながら…。

「おかえり、バンクーバ。割と早かったな。」

『スーパードッグ』なるものに様々な薬品ビンを入れ、セロファンは研究所へ帰ってきた。

「買ったか？」

「ああ、買ったとも。これを確認してくれ。」

セロファンは言われ、袋を青年に差し出した。青年は、すかさずそれを見つめる。だが、なんともいえない顔をして彼はセロファンの方を向いた。

「…これで全てか？」

「ああ、そうだ。きちんと紙に書いてあった通りのものを買ってきたぞ。それでも不満があるのか？」

セロファンはそう言って、紙を置いて部屋を出て行った。

「ヴィファリアス…これはどういうことだ!？」

「そう言われてもな…」

「こんなこと、ありえない。だって、僕は確かにこの紙に…欲しいものを全て書き記した!」

「しかし、そのいくつかがなぜか消えていた…と、言うわけか。」

セロファン青年の怒っている様子は、モニター越しにヴィファリアスにも確認できた。

「セロファン、これは私の想像だが…もしかしたら、やつはこの世界にはない『鉛筆で書かれたものを消す道具』といったものを持っているのでは？」

「そんな馬鹿な…発明してもいないものを持つているはずが…。」  
「やつの正体は不明だが…やつがいた世界が、かなり技術の進んでいる可能性もあるだろ？」

「まあいい。目的の物質をつくる具体的な計画をまだ立てていない以上、偶然に頼りながらの実験だ。どれが必要でどれが不要かわからないんだからな、とりあえずは。」

「あの老人に文句を言うのなら、まずは根拠を探す必要があるそうだな。」

「そのようだ。あいつの正体をつかむのも、当分後になりそうだし、じゃ、くれぐれも監視を続けてくれ。」

「了解した。」

そこで通信は終了し、ヴィファリアスは小型通信機のモニターを閉じた。

「バンクーバ・ハンバーガー…何を考えているんだ…。」

「ある意味九死に一生だな、これは。」

セロファンは、研究所の一室、彼が普段生活している部屋の寝具で寝転んでいた。彼の手の中には、200X年から来たときに偶然持っていたのであろう、白い直方体の物体があった。

「…自分で自分の運命を変えてしまった…もし私が、この体験をしていなければ、実際より4年早く夢に近づくところだったな。それがこの有様か…ま、さほどたいした事のない路線変更だが。」  
彼は物体を、衣服のポケットの中にしまいこんだ。

（…二人に正体が暴かれるのも時間の問題になってくるな…。どうすれば、安全に生きることが出来るか…）

セロファンは立ち上がり、部屋のドアを開けた。研究所の機械の近くに、青年の姿が見える。

(…長居は不要、か…そうか、あの手があった！)

「セロファン、頼みがある。」

「…なんだい、藪から棒に。」

駆け寄ってきた老人は、青年に話した。

「…ここを出て行く!？」

「ああ。ちよいと用があつてな。終わったら戻ってくる。」

それから、彼は少しばかり悩んだ。彼にとってこの老人は、便利な人間であり、邪魔な人間でもあった。どちらかというと後者だ。

「…別に構わないよ。少しばかりだったら、金ぐらいだしてやる。」

「恩に着る。」

「でも、何をしに行くかぐらい教えてくれたっていいんじゃない？」

「そうだな…『人探し』といったところだ。」

「人探し? 誰? もしかしたら、僕も知っているかもしれないよ。」

老いている方のセロファンは、口を開いた。

「ノアという男だ。」

## 第五話 尋ね人

ここは、とある町の市場である。たくさんの人でにぎわう中、一人の老人がいた。

「ノア…聞いた事ねえな…」

老人に話しかけられたもう一人の男性は、そう答えた。

「…そうだ、たしか遠い親戚の一人が、フライド・ノアとかフライト・ノアとかいう友人がいるって言っていたような気がするんだが…」

「何?…年はいくつだぐらい分かるか?」

「あいつの年齢からして、ざっと95ぐれえだな。もしくはそれ以上、寿命を考えるともうじきポツクリ逝くところだ。」

「…そうか…ありがとう。」

老人は礼を言うと、男から離れていった。それを見ながら、男は独り言を言う。

「あんなんで人を探すつてのか…ボケた老人だ。」

(もう少し、情報収集をしてから来るべきだったな…)

研究所を出て、貰った金で飛行機に乗りこの場所に辿り着いたセロファンは、ただ苦笑をするばかりだった。

(分かっているのは、本名かも分からない『ノア』という名前と…『アジアとヨーロッパの境の地域』という大分おおまかな居場所のみ…馬鹿なことをしてしまった。)

そう思いながらも、これは仕方のない事態だ、とセロファンは考えた。

(あの研究所にいることは『危険』となった。もしそれが回避できたとしても、洪水計画の時に私を生かしてくれるとは思えない。ならば道は一つ…大洪水発生後の生存者であるノアという男に頼るのみだ。やつは箱舟を作り、知り合いを乗せて生き延びた。…今の内

にノアと親しくなっておけば、私もその内に一人になることができるだろう。だからこそ…今を頑張らなければ。)

それでも、彼は人に会うたびに、目的の人物を尋ね続けた。

「ノア…ああ、いたな。」

「本当か？」

あれから2週間が経とうとしているだろう。その時、セロファンはやっと望んでいる答えにめぐり会えたのだ。

「この先に、一軒の…さびれた工場がある。」

「『さびれた』？どういうことだ？」

「建築の仕事をやっていたんだが、どうやらもうじき廃業になるらしい。ここんどこ不景気続きだつて聞いているからなあ。」

(…となると、箱舟製作時もあり裕福ではなさそうだが…どうやら本物のようだな。)

セロファンは確信し、道を歩くのであった。

男の言葉がかなり正しかったのか、工場の荒れようは酷かった。おそらく木材を切断するためである機械は、すっかり錆びてしまっている。清掃もされておらず、屋内なのにホコリや塵、土砂までもが散らばっている。その中で、一人作業机に向かって頭を抱えている男がいた。

「ノアというのは…お前か？」

セロファンはすかさず話しかけた。

「…誰だ…あなたは…」

「おまいさんを訪ねに来た。ただ、それだけだ。」

「…冷やかに来たのか？」

「そうじゃない。お前に会いたかったんだ。」

励ましの言葉に聞こえるはずの彼の言葉も、この男には通用せず、

男は起き上がらせた顔を再びうつむかせた。

「俺はもう…倒産だ…後は死ぬだけだ…。生きていくすべを無くしてしまった…」

「だからなんなんだ？」

「そんなこと…そんな…こと…」

ノアはますます落ち込んでいった。

「俺には夢があった…いつか、会社を建てて、儲け、幸せに暮らす…そういうごく平凡な夢だ。そのために、俺はなんでもした。金はある限り出し、どんなにつらい仕事でも受けた…でも、全てが上手くはいかなかった。」

半分泣きべそをかきながらも説明を続ける。

「誰のせいでもない…俺のせいだ…。なにも考えず、ただ『夢に近づこう』とだけ考えながら生きてきたせいで…計画は歪んでしまったんだ…」

「だからなんなんだ!?!」

セロファンは反発する。

「失敗なんてものはいくらでもある。それに立ち向かっていこうとする力が、大事なのではないのか!?!」

「どうにもならない事だつてあるんだよ!!どんなに努力しても…やる気があつても…否定したい結果が出る時があるんだ!!諦めるしかないだろ!?!」

この時、セロファンは男の言葉の中に、自分自身を感じたのだ。

(…私とて、夢を追い続けている…だが、それは決して叶ったとはいえない。『最高』というタイミングがなかった。途中、諦める事もあった。でも私は…)

「…夢を追い続けるんだ。そうすれば、きっと報われるはずだ。」

「突然やって来て、あんたに何が分かるってんだ…」

なおもノアにそう言われながらも、セロファンは言った。

「夢を諦めたその瞬間…運命は変わるのだよ。」

「運命？」

うつむきながらもノアはオウム返しをする。

「ああ。結果がどうという話ではない…その『夢』を追うか追わないかによって、人生という運命は大きく変わるものだ。」

「でも…俺にはまだ立ち直る力はあるが…今度もし失敗したら、なにもかも終わり…もしそうなたらどうするんだ！？それを回避するには、夢を捨てるしかない…最低限の生活で我慢するしかないんだ。運命が変わるだって？あなたに何が分かるんだよ！！」

「私もその一人だ！！」

「え？」

セロファンはいきなり怒鳴った。そのせいでノアは一瞬止まる。

「結果は違った…私自身も、結果が重要だと思っている。だが、その過程のおかげで今に繋がっているものもある。…ノア、夢を追うんだ。」

そう言うと、セロファンは歩き出した。

「おい…あなたは一体…」

「君の運命を変えに来た。そうでなくては私が困る。」

「…なんだかよく分かんないけど…俺、やってみるよ。あなたに言われて分かった。もう一度…人生を賭ける。」

「…頑張れよ。私はもう行くが、このことと私の存在を忘れないでほしい。」

「ああ。忘れないよ…また何処かで会おう。」

（また運命を…変えてしまったな。）

飛行機の中、セロファンは思った。

（これも生きるため、か…まあ、ひとまず難関を一つクリアしたところだ。やつに死なれては台無しだからな。）

出港時間はどんどん近づいてくる。あと1分もすれば陸から離れ

るだろう。

(これから先どうするか…。やはり研究所にいと危険だな。ならば…)

セロファンはいきなり立ち上がった。

「私も人生を賭けるとしよう。」

一方、研究所ではセロファン青年の元に一通の入電が届いていた。

「バンクーバ：ああ、あの老人からか。何処に行ったと思えば、こんな少ない通信で…」

彼は文章を目で追った。しかし、その内容は…。

「なになに…しばらく…尋ね人のところで…生活する事に…した！？」

思わずため息をかくセロファン・フリーザン青年であった。

## 第六話 光、そして闇

ノアの工場へ一人の老人が訪れ、その後働く事になってから3年が経とうとしているだろう。

「休憩の時間だ。30分間休養をとれ。」

工場内に放送が流れた。作業をしている人たちは、汗を拭きながら手を休めるおよそ60人はいるだろう。

そう、ノアの工場は復興したのだ。それも、『出世』という望ましい形で。

「バンクーバ、お前も休んだらどうだ？」

「そうだな…旅立つ準備もあるしな。」

そう言うと、バンクーバなる老人も書類を机に置いた。隣で話しかけたのは、この工場の設立者、同時に工場長であるノアだ。彼は再びバンクーバに声をかける。

「今月の収入はどのくらいだ？」

「自分の目で確かめてくれ。」

言われた通りノアは書類に書かれた数字を読み取った。

「すごいな…これも全てバンクーバ、あなたのおかげだよ。」

「私の？」

「そうさ。3年前あなたが俺を訪ねて、そして助言をしていってくれた…だから立ち直り、今に至ったんじゃないか。そうでなきゃ今頃、住宅街の片隅で質素な生活をしていたところだよ。」

「決断をしたのは君自身だ。そうだろう？」

「あなたにあんな事言われたら、強制とあんまり変わんないよ。」

彼の言葉を聞くと、バンクーバは少々笑顔を見せた。

「では、もう行かなくてはな。」

荷物を持ったセロファンは、工場の外で大きく背伸びをした。

「工場の方は、私がいなくても大丈夫か？」

「もう問題点はないよ。あとは任せてくれ。俺の工場だしな。」

「そうか…私とて、できればまだここに居たい。だが、3年ちよつとも前の雇い主に挨拶もないのは人としてまずいからな。なあに、終わったらすぐに戻る。」

「ああ、分かった。待っているよ。」

そして、セロファンはポケットからなにかを取り出した。おそろく設計図であろう。

「ノア、頼みがある。これを…製作してくれ。」

「なんだい、それは？」

「私が行った後で見えてくれ。君ならすぐに出来るはずだ。」

彼はノアに紙を渡した。

「一つ言っておくが…軽い冗談だと思ってくれていい。それをお前が完成させるかさせないかによって、世界は大きく変わってくる。よく覚えておいてくれ。…では、また会おう。」

「今度来るときが世界沈没のとき、だな。」

空港への道をセロファンは歩いていった。

「戻る頃には箱舟が完成しているだろう。もつとも、なりゆきからノアが独自の方法で洪水を予想することはなさそうだから、あえて私が自然な形で行動させてやったのだから。」

もちろんのこと、先ほど彼がノアに渡した紙はこの後必要になつてくる箱舟の設計図であった。

「もうじき、研究所での私は手に入れることになるだろう。さから視察にいかねければならない。…そう、あの物質を…」

セロファンがいつものように言葉を言いかけた、その瞬間であった。予期せぬ出来事が起きたのだ。

彼の後方、空港とは真逆の方向で、爆発音が響いた。

「な、なんだ…」

よく見ると、建物が燃えている。しかし、それは…。

「あれは…ノアの工場か！？ま、まさか…」

建物は1キロほど離れたセロファンの目からも、確認できた。煙幕が上空を覆っている。

「…仕方がない、今行くぞ！！」

彼は用を忘れて走り出した。

時を同じくして、青年、セロファンも自分の研究所で思わぬ事態が起こっているのを間近に見ていた。

「これは…一体…」

比較的太めで、ゴムで栓のしてある試験管には、得体の知れない物質が入っていた。だが、その試験管にはヒビが入っていて、今時点でもそのヒビは広がっている。しまいには試験管が割れ、物質は流れ出た。しばらくするとその物質もだんだんと蒸発して消えていく。

「なぜ…ヒビが？それもこんなに硬いガラスが…いや待てよ…。もしかしたら、こいつは…」

思わず彼は、研究所内の棚からなにかの調査器具を取り出して、その物質に近づけた。器具のメモリは驚くべき数字を出した。

「…やっぱりだ。こいつは周りの空気の気圧を極端に低くする性質を持っている。そうだ…これを利用すれば…」

セロファンは近くにあった機械の通信回線を開いた。まだそのモニターには誰の姿も映っていないが、その間にも彼は薬品ビンを眺めながら紙に計算式を書いていた。数十秒すると、モニターに一人の男が現れた。ヴィファリアスだ。

「また何かあったのか？」

「…ああ。ついに叶うようだよ、僕の夢が…『大洪水計画』という形でね。」

「『大洪水計画』?」

「そう…さつき思いついたんだ。これを見てくれ。」

セロファンは、試験管内で発生した物質を、ヴィファリアスの目に見える場所まで移動させた。蒸発のせいでもう量は少ない。

「何だ、それは?」

「とりあえずは…『化合物X』とでも名付けておこう。」

彼は近くにあったイスに腰をおろした。

「この前から引き続き、僕は殺傷能力のある有害物質を生み出そうと、実験をしていた。今回はちよつとおふざけ半分だったけどね。」

そして、可能性がありそうないろいろな物質をできるだけ多く入れてみた。量なんて適当だよ。でも、もしものこと…運よく目的の物質ができることもあるかもしれない。だから、その時のことを考えて使った量や化合に要した時間とかは記録しておいたんだ。そして結果…奇跡が起きた。」

「それができた、という訳か。一体なんだというんだ、その物質は。」

それから彼は、ついさつき発見したばかり物質とついさつき判明したばかり性質を話した。

「もし、計算が正しければ…これを利用しない手はない。大発明だ。その物質を大量につくり、空气中に開放すれば、大気にはかなりの大きさの低気圧が発生するはずだ。そして低気圧は巨大な台風を発生させ…大洪水により人間は死に至るはずだ。」

「ノアは…工場長のノアは何処なんだ!？」

一方、200X年の某都市よりタイムトラベルしてきた方のセロファンは、工場の爆発で傷を負った負傷者が運び込まれたという病院へ急行していた。セロファンが怒鳴りながら尋ねると、病院の白衣を来た人間は、一度調べに行った後答えた。すぐに彼もその部屋へと向かった。

「ノア、大丈夫か！」

セロファンはベッドに駆け寄る。彼の体は全身に包帯が巻かれており、かろうじて言葉は話せる状態だ。

「一体…何があったんだ？」

セロファンに言われると、付き添っていた別の男が『機械の故障です。』と答えた。

「そうか…大丈夫だ、お前は死なない。…死ぬはずがない。だって…お前は…」

「いいんだ…バンクーバ…」

「…そうだ…すべて私のせいだ…。3年前のあの時、君にあんな事を言わなければ…今頃、こんなことにはならなかった…こんなことには…」

「そんなこと…ないよ…。結果は予想と違ったけど…いい…人生だった…夢を…追いつけたから…だから…。あんなの…バンクーバのおかげだ…。…じゃあ…」

だがその日、無念にも夢を諦めずに生きた一人の男の魂は、天へと昇っていったのである。

## 第七話 終末への道

「最善を尽くしました。しかし、あの大きな爆発の怪我では、どうにも…ご冥福をお祈りします。」

医師の言葉を最後に、ノアの体は部屋から出された。

「ああ…なんて事をしてしまったんだ…」

その後まだまだ患者がいるということで病室を出されたセロファンは、自分の過ちを悔やんで人一倍落ち込んでいた。

「なんと…という失態だ…！…やつは生きるはずだった…しかし、死んでしまった。…運命を歪めてしまった…どうすれば…！」

だが、その想いと対になる考えもあった。

(もしかしたら…あの男は違ったのか?)

もちろん、ノアという名で同じように箱舟を作ることができる人物など、この世界、それもこの辺一帯だけでも複数いるはずだった。今頃になってその事実が浮かび上がってきた。

「…まだまだ…信じるんだ。きっと、第二のノアが現れるはずだ。そう…祈ろう。今私がするべき事は…」

セロファンは決心し、再び研究所へと向かった。

「ヴィファリアス、こうやって直接会うのは何年ぶりだろうね。」

「別に意図的に避けているのではないのだがな。」

セロファンの言葉の通り、彼とその部下は研究所で対面していた。ヴィファリアスの手の元にはいくつかの薬品ビン、それもかなり大量にある。

「1年前、市場のある町が住民からの苦情のおかげで『車両通行禁止区域』を取り払ってくれたから、今では一時間もあれば往復できる。」

「じゃ、さっさと始めよう。」

セロファンは薬品を受け取り、開封した。机には『大洪水計画書』

とタイトルが書かれた紙が置いてあった。彼が実験の経緯を元に、物質Xの作成方法を詳しく記したものだ。使う物質の量の対比はどれもかなり中途半端な数で、それでいて何桁にもなっている。

「とりあえず、以前起こったことが間違っていないかのテストを兼ねて、少量のXを生み出す。それが成功したら、具体的な計画を進ませよう。そしてら僕は…夢を現実のものにしたと同じだ。僕は生き残り、世界を我が手に収める。もちろん、君も楽園へ招待してやるよ。ずっと一緒にやってきたんなもんな。」

「そう言ってくれると嬉しいよ。」

セロファンは作業をし始めた。しかし水をさすようにヴィファリアスは尋ねてきた。

「そういえば…バンクーバ・ハンバーガーはどうするつもりだ？」

「バンクーバか…。いや、もしあいつが今頃ここに戻ってきたとしても、僕は彼を生かしはしない。世界征服というからには、必要なのは僕を含めた最低限の人間だけだ。…死んでもらうよ。」

「セロファン、実験は順調か？」

研究所では、危険な実験用の嚴重な機械の中でXの製作、共に詳しい調査が進められていた。そこには二人の人間が。

「どうやら、あの時の化合は不十分だったらしい。故に完全なるXは、とても強力な能力を持っているだろう。」

「そのようだな…。」

「それより、お前にはお前の作業があるだろ。」

「分かっている。すぐに取り掛かるう。」

それから数日後、怪しい計画が実行されようとしている研究所からさほど離れていない町の中では、もう一人のセロファンが情報を集めていた。

「あの研究所か？…ああ、教えてやるよ。」

セロファンは、今行つたとしても計画の進み具合によっては研究所に入れる可能性は低い、と悟り、このように何か変わったことはないのか近辺の住民に尋ねていた。

「なんでも、噂では建物の補強をやっているらしい。何のためにやっているんだか知らないがな。」

それを聞き、セロファンはやや頭を抱えた。

（少々計画が早まっているようだ。まだこれぐらいは問題内だが…）

彼の目線の先には小さくある建物があつた。それこそ研究所であり、それは丘の上にある。

（まずは…準備が必要、ということか…）

その後セロファンは、ある場所へと向かつた。そう、彼が『生』を求めている場所へ。

「これで、準備万端だな。」

青年の心は光に満ちていた。彼の隣には、いうまでもなくあの男が。

「洪水発生時に僕と君が入る用のカプセルは、既に開発済み…いつでも使用可能だ。それに、もしもの時のことを考えての建物の大幅な増強は終わったのも同じ。」

計画用のXはもう出来たのか、というヴィファリアスの質問に対し彼は即答する。

「…大丈夫だ。Xの影響で発生する低気圧にはクセがあつてな。台風を誕生させるにあたっては問題ないんだけど、前みたいにガラスを割つたりする力はそれほど大きく無いんだ。だから、ちよつと強度のある金属を使えばいい。」

彼は、何処からかビンのようなものを取り出し、部下の手に預けた。

「この中に凝縮して入れてある。ありつたけ作つたからな、効き目

は十分に期待できるだろう。これにはタイマーがセットであつて、  
一時間ほどしたら開放するようになっていて。…ヴィファリアス、  
これを街の中に置いてくる事が、君の最後の任務だ。頼んだよ…僕  
の、最高の部下よ。」

その日、布を体にまとつた男が、街の一角へと足を運んでいた。  
そして男は町の中心、いわゆる『広場』という場所で立ち止まった。  
彼は、懐に手をいれ、何かを取り出した。通りかかる人の目からは、  
カプセル状のものであると分かるだろう。カプセルは手の中には納  
まらないほどの大きさで、どうやら機械も詰まっているらしい。す  
ると男は、その物体を地面へ置いた。彼はその存在を忘れたのか、  
それとも意図的なのか、カプセルを置いたまま去つて行つた。

その後も何十人もの人々がその場所を歩いていき、地面に置かれた  
謎のカプセルが目に入ったが、誰一人それを気に掛ける事はなかつ  
た。それもそうとも、このカプセルがやがて開き、その中から出て  
きた物質が予想をもしなかつた大惨事をもたらす事など、知る由も  
無かつたのだから…。

「もつじきか…。」

窓から景色を眺めながら、青年はふと呟いた。

「とうとう、夢は現実と化す…今まで努力してきた成果だ。この世  
界に、いくら夢を叶えることができただ人間がいた？どうせ、その数  
字は乏しいはずだ。そして僕は、その内の一人になろうとしている  
…。世界征服：誰でも一度は望みたくなることだ。でも、今までそ  
れを成し遂げた人物は存在しない。…僕が神だ、僕が王だ…いや、  
僕が悪党だ。」

彼は向きを室内へと変えた。研究所の中には、二つほど人間が入  
れるカプセルがあつた。酸素ボンベをつんでいるのだろうか、比較

的大きな筒状のものが装備されている。

「…いい夢を…見せてくれよ。」

その言葉を最後に、彼はカプセル内にその体を沈めた。ガラス製のフタがだんだんと閉じていく。そして、密閉状態となった。彼は目を瞑った。だが、後方からは一人の男がただそのカプセルを見つめていた…。

「凝ったことをしてくれるな、まったく。」

年長セロファンは研究所の前で四苦八苦していた。

「元からある数桁のパスワードに加えて、指紋認証、虹彩認証、それに音声認証までつけるとはな。まあ、どれもこれも私には通用しないが。超古代文明ということもあり、年をとったこの体でも同一人物だと認識される機能があるのという事が役に立ったところだ。」

セロファンは厚い扉を開き、中へと入った。

（研究所内に試作機のカプセルがまだあったはずだ。確か記憶ではこの研究所自体は台風能耐えられなかった。しかし、正常に作動するカプセルさえあれば安全だ。）

彼は目的のブツがある部屋まで進んだ。だが、その途中彼は驚くべ事実を見るのであった。

「…お前は…何をやっているのだ!？」

彼が目にした物。それは、青年の入るカプセルを破壊しようとするヴィファリアスの姿だった。

## 第八話 世紀の大洪水

「見られてしまったようだな。来ると思っていたよ、バンクーバー・ハンバーガー!!」

彼は破壊工作を止めると、いきなり体を取りまいている布の中から銃を取り出した。小型ながらも、人を殺すにはもってこいだ。仕方なくゼロファンはやや引き下がる。

「一体：貴様は何をしているんだ!？」

「何って？見ての通りだ。上司を殺してはいけないというのか？」

「くっ…」

反抗しようにも、目の前の男に命を預けているこの状態では、何もする事ができない。

「計画通りだ：なにもかも。」

「『計画』?」

老人の疑問に、銃口を向けたまま説明を始めた。

「…元々私は占術師をしていてな。出身地ではよく当たると評判だった。私としても自分自身がかなり力のある占い師だと感じている。だが、それがあある事態を引き起こしたのだ。」

その日、彼は同じく占術師をやっている友人に言われ、ある難しい占いをする事となった。

「未来を…見る?」

「ああ。なんでも、かなり高度な術らしい。誰か、特定の人間の運命を予言するのじゃあ訳が違うんだぜ。俺も前に一度やってみたけど、どうも上手くいかないんだよな、これが。」

「で、人一倍占術の能力が高いと思う私に試してみる、ということか。」

言われた通り、ヴィファリアスはそれを行った。術には集中が必要との事で、部屋の中は彼一人となった。友人から教わった呪文を

唱え、目をつぶった。むろん、いくら自分の能力に自信があるとはいっても、まさかこのような高度な占術が可能になるとは思ってもいなかった。

(なんだ…これは…)

未来であるう仮想現実の中に、ヴィファリアスはいた。術の成功を嬉しく感じるつかの間、そこは…。

(…街中が…水浸しじゃないか…)

空は黒雲で埋め尽くされ、ザアザアと大雨が降っていた。その雨により地面が海のようになっており、よく見ると泥水に流される人の姿もある。それはとても恐ろしい光景だった。

(嘘だ…こんなことがあるはずが…)

その時のヴィファリアスの感覚では、この世界の洪水は3日以上も続いた。途中で、緊急事態のため空へと飛び立ったと思われる数機の飛行機が、燃料を尽かされたためだろう、水の中へ不時着する事もあった。その時は運悪く、初めは浮かんでいたものの、乗っていた乗客に加えてどうにかして生き延びようとする流水の漂流者たちの重みのせいで、見事に沈んでしまったのだ。そしてヴィファリアスは、人々の声にならない『死』の叫びを聞いたのであった。

終わりまでは見ることが出来なかったが、ようやく目を開けるとができたヴィファリアスは、それを友人に報告した。だが、友人は冗談はよせとだけ言って本気にしてはくれない。

「だって、この世界では今までに一度もそのレベルの気象現象なんて起きてないんだよ。いくらなんでもな…見間違いないの？」

彼の言っていることはある意味正しかった。事実、この後ヴィファリアスが調べたものの世界のどの国の歴史にもその事実が記されてはいなかった。多少は彼も、自分は未来透視とやらに失敗したの

かもしれない、とは思った。だが、それでも自分の見たものを信じていた。それはあまりにも衝撃的で、彼の頭から消えないでいたからだ。

「しかし、もしこれが現実が起こってしまったら…大変な事になるだろう。私だって死ぬ。…少なくとも、自分を生かそうと、私は計画を遂行したのだ。」

「…何をしたんだ？」

眼光を光らせて、彼は言う。

「あの時、私は見てしまったのだ。まるでこの洪水を予知し、それに備えたかのように嚴重に強化され、洪水の被害をほとんど受けていない一軒の建物を。そして、建物に書いてあった『セロファン・フリーザン研究所』という文字をな。」

「だから…やつに侍従したのか？」

「ああ。決して本当に起こるかどうかわからない…実際にその研究所が存在しただけでも、偶然によるものだと初めは思った。だが、私は占術師という裏世界に入りかけた人間、とんでもない情報が入ってきたのだ。そう…その研究所を建て、日々謎の研究をしているある男は、『よからぬ事』のためにそれをしている、という噂がある。私は確信したのだ…生き延びるためには、男の忠実な部下になり、生存する方法を手に入れなければならないと。」

説明が終わったからなのか、彼の銃にかける指は動いていった。しかし、セロファンはその時ある疑問を思い浮かべた。撃とうとするヴィファリアスを静止するように、彼は聞いた。

「ならばなぜ…今のような行為をしたのだ!？」

一瞬間をおいてから彼は答える。

「私も…彼と同じ夢を抱く『一人』だからだ。」

この時、世界はとても慌てていた。

「一体どうなってんだ…この空は。」

空に突然現れた雲は数分間にして、地球全体を包み込んだ。そして、大量の雨が降り注いだのだ。以前このような事態が起こっていない故に対策を甘くしていた世界で、洪水は建物を破壊し、地盤を緩め土砂崩れを起こす。それに伴い何千、何万、何億人も命が次々と消えていく。一旦は臨時で飛行機が飛び立つものの、雨は一向に収まらず燃料が切れるのがオチであった。

「どういうことだ？」

次第に雨音が激しくなっていく研究所の中で、セロファンは再び疑問を抱く。

「言った事が分からないのか？私も『世界征服』という野望を持っていた、ただそれだけだ。理想郷に二人の間はいらぬ！この私一人で十分だ。愚かなる天才科学者、セロファン・フリーザンを利用したのだ。」

そう言うと、ヴィファリアスは手の中にある銃を見つめた。残弾がもうあまり無いのに気付いたらしい。いつものように、また布の中に手を入れる。しかしその瞬間、隙を見てセロファンは動き出したのだ。

「貴様は…地獄に墮ちるのだ！！」

彼はヴィファリアスの方へ突進した。いきなりの出来事のため、標的となった男は反射を鈍らせてその攻撃を喰らってしまった。銃はまだ手に持ったままだが、先ほど片手で取り出そうとした弾を補充するための箱は研究所の奥へと吹っ飛び、二人からの死角に入った。それを見ていたヴィファリアスの隙をセロファンはまたつき、運を頼りに彼の衣服の中を手探りで探し、もう一丁の予備らしき銃を取り出した。予備とは言えども、命中さえすれば機関銃と用途は同じだろう。

二人は立ち上ってり距離をとり、お互いに銃を向け合う状態とな

った。

「どうする？そんな残弾で、私をしとめられる自信があるのか？」

「さあな。バンクーバ…貴様は一体何者なんだ？」

「私も君と同じように…欲望に満ちた老人だ。」

ゼロファンが答えたその時、敵は行動に移したのだ。彼は銃を、この研究所の主である青年が入っていない方の、まだ空のカプセルへと乱射した。カプセルからは煙が発生した。

すかさず、怒りを覚えたゼロファンは彼へと銃を乱射した。ヴィファリアスは残弾が切れたのだろう、抵抗しようにもできずにゼロファンの攻撃に動かされ、とうとう研究所の扉の前まで来た。すると、ヴィファリアスは態度、性格、そして口調までもを変え、

「ま、待ってくれ…さっきまでのことは無しにしようじゃないか。私たち3人で楽園へと行こう。ああ、そうしよう。カプセルがなくとも、この補強された研究所の中にいれば安全だ。だから…」

「勘違いしているようだな、ヴィファリアス。さっきから頭の冴えるヤツだと思っていたのだがな。生き残るのは…2人だぞ。」

「2人？…そうか、やっぱり君も同類か…。ゼロファンを殺す、それが一番の選択肢だとうまく理解できたようだね。見直したよ、爺さん。」

だが、ゼロファンはなぜか笑顔を浮かべている。彼は言った。

「…死んでもらうのは…お前だ！！」

彼は最後の弾丸をヴィファリアスの足元へと撃った。彼は間一髪で避けたが、そのせいで既に立っている位置は研究所の外。ゼロファンはその時を見はからって、扉をしめて内部からの完全ロックをしたのだ。

## 第九話 新たなる戦い

「ひとまずは…敵は消えたな…。」

助けてくれ、中に入れてくれ、というヴィファリアスの声も次第に消えていき、安心したセロファンはため息をついた。

「さあ…これからどうするかだな…」

一時はホツとした彼だが、まだ全てが終わったわけではなかった。「たしか私が洪水で死んだ後、ここに戻ってきた時には…研究所はなかった。つまり、予想と異なった、洪水に耐えられなかったのだ。」

セロファンは、過去の自分が入ったカプセルへ歩み寄った。ヴィファリアスはどうやら爆弾かなにかを仕掛けようとしたのだろう。

しかし、それはセロファンによって途中で阻止されてしまったため、ブツはセットされておらず、破壊工作によってカプセルの機能が損傷したのみとなった。この状況でそれを修復するのは不可能に近い。「これで、なぜ私があの時、万全の体制で待ち望んだ計画に自らの命をも奪われたのか、やっとつじつまが合った。まあそれもそれで、結果的にはよかったのだがな。」

彼は視線を、空のカプセルへと移した。さっきヴィファリアスに撃たれたため、もう片方のものほどではないが、スクラップ状態となっている。周りを見渡しても、それに代わるような予備のカプセル、及びその材料はなさそうだ。

「やはり、これを直して使うしか生き残る方法は無さそうだな。しかし…」

セロファンは窓を見た。特注品の強化ガラスの向こうに見えるのは、序所に水没していく街であった。研究所は丘の上、ここまで水が来るにはま数十分かかるだろう。

彼は目を凝らせて自分の手を見た。

「私に…その技術があるのか？」

セロファンは今までに様々なものを作ってきた。だが、その中で『開発』と『修理』のそれぞれ違う難しさを知っていたのだ。その上、カプセルは自分自身で開発したものではあるが、あのガギゲゴという最高傑作とは存在価値（印象）が大きく違うもの、すっかり忘れきってしまった。

「時間もそれほどなさそうだが…試してみる価値はある。」

「くそ…どうすれば…」

作業を初めてから早15分。セロファンは自分の力の甘さに苦笑していた。雨はますます激しくなっていて、水は研究所のすぐ下まで来ていた。そんな中、彼はある人物の名を口に出した。

「ノア…教えてくれ。私はどうすればいい？努力さえすれば…結果が出るものなのか？」

そして、頭の奥から言葉が聞こえてくる。

「自分を信じるんだ。目標へ向かって…つき進め！諦めたその瞬間…運命が変わるんだろ？」

「そうか…分かった。お前に言われたとおり…いや、私が言ったとおり、やってみよう。」

それから数十分後。研究所の中は流れ来る雨水に占領されていたのだ。

その日、洪水は完全に陸から消え去った。発生から数日が経っているだろう。地上には、誰一人生きた人間の姿など無かった。皆、死んだのだ。建物はすっかりガレキとなっている。唯一残っているのはだいたいの地形と、水に耐えることが出来た動植物たちぐらいだ。

その中で、ある場所の建築物が崩れた後の岩の山から、不思議と一人の老いた男が這い上がってきた。セロファン・フリーザンであ

る。

「一時はどうなると思ったが…これも私の悪運のおかげだな。」

彼が入っていたカプセルは運よくギリギリのところまで修復、完成したのであった。外見こそ酷いものの、このように生き延びることはできた。彼は荒野となった世界を見た。

「今…この世界で生きているのは、私と…ノア一行だけか。」

その時、自分で言ったセリフから、過去自分が殺したのも同じ男のことを思い出した。

「そうだ…ノア、お前のおかげだ。決して、無駄な人生…無駄な存在、無駄な死ではなかった。ありがとよ！」

軽く言い放す。ふと、あるものが目に留まった。それは、若き日の自分が入ったカプセルであった。もちろん既に息絶えていた。死因は、カプセル内に流れ込んだ水による溺死か、それとも酸素注入が機能しなかったための酸欠か。どちらにせよ、切欠になっているのは『あの男』の行動によるものだ。

「自分で自分の死体を見るとはな…なんともいえない気分だ。ちょうど今頃、神様とお話をしているところだろう…フツ、また苦悩が始まる事になるな。ともかく、ここにははややこしい事になりそうだ。生き返る前にさっさと離れよう。」

彼は道なき道を歩むのであった。

「これで…よかったのでしょうか？」

話はややとぶが、セロファンを甦らせた神は冥界で、その姿を伺っていた。隣にいるのは、神の助手にあたる者だ。

「何を言う。人間は…死んだのだぞ。なにもかも、消滅したのだ。彼らは文明を発達させ、それは人間を創世したこの私の想像をも超えた。彼らは神聖なる、優れた生物なのだ。だが…」

神は悲しい目をして言った。

「それは、一人の男の…くだらない欲望のために無残にも消え去った。これは許せる事であるのか？」

「確かにそうですが…」

神は向き直る。

「100年の寿命だ。確率は半分半分：私はあの男の良心と頭脳、そして運に賭けた。成功、つまりやつが人間と同等の生物を作るこゝとが出来れば、私のこの悲しみは取り払われる…しかし、それが成し遂げられなかった場合は…私は彼を無にする。」

「うつ…どうなつてんだ？」

数時間後。神との契約により、100年の寿命が与えられた体でセロファン青年は甦つたのだ。

「まだ不思議な気分だ…どうなつてんだろ…。」

そして彼は、荒れ果てた地上を見た。跡形も無い。彼は夢を成し遂げたはずだ。だが、今はその感覚はなかった。

「研究所が耐えられなくて…その上カプセルが故障していたのか…。とんだ計算外だったようだ。それにしても、なんていう世界だ…こんなもののために、今まで苦労してきたのか…僕は馬鹿だったのかな。」

彼は世界を眺めた。勿論、この時のセロファンは、今の事態が一番信用の置ける部下の仕業だとはこれっぽっちも思っていない。想像しようする意思が全くないのだ。

「あれ…そういえばヴィファリアスは？」

頭の中から出てきたその男の記憶は、セロファンをすぐに行動させた。だが、いくらガレキをあさっても、その姿は見つからない。彼は状況を察する。おそらく、彼は…。

「…冗談だろう…ヴィファリアス…お前は…まさか…」

目から涙がこぼれおちた。コンクリートに水分がしみて、色が濃くなつていく。

「なあ…言つたじゃないか…。一緒に理想郷に行こうつて…お前は

最高の部下だからって…どうしてだ…なんでいなくなっただ…！  
！」

彼は地面に膝まづいた。唯一の頼もしき部下の死と共に、ここに  
たった一人でいる孤独感もこみ上げてきた。しかし、今ずっとこう  
している訳にはいられないのを、彼も理解している。

「…まだだ…終わったわけじゃないんだ…。僕にはまだ…神からの  
使命が残されている…。」

そう言うと、セロファンは立ち上がった。

「やるんだ…運命を変えよう。無になんかなりたくない。科学者セ  
ロファン・フリーザン…悪党セロファン・フリーザンの意地を見せ  
てやる…！」

彼は天に向かって叫んだ。神にその声が届くように。

「ありがとう、ありがとう…。」

ちょうどその頃、後の日本と違いようやく水が退いてきた大陸の  
中心部のある場所には、一隻の箱舟があった。船の中からは、男性  
女性問わず子供からお年寄りまで、十数人の人たちが降りてきた。

彼らは洪水から生き延びることができたのだ。船長らしき男は、空  
を見上げていた。

「それにしても…ずいぶん遠くまで流されたようだな…。」

「生き延びただけでも幸いじゃよ。」

彼に助けられた一人の老婆は、感謝の言葉を言いながら顔を向け  
る。

「そついえば…名前はなんというのじゃ？命の恩人じゃ、それくら  
い教えてくれてもいいだろう。」

「名前？ああ、教えてやろう。私はノア、ヴィファリアス・ノアだ。」

「

## 第十話 大洪水ビフォーアフター

「まったく、あの老人も人が悪い。」

船から下りてくる人たちを見ながら、ノアは呟いた。この乗客たちは、見捨てるはずだった自分の知り合いと、ここまで来る途中に助かりたい一心に船にしがみついていた人間だ。

「もしもの時のために、気遣いに思われながらも若い頃技師をやっていたこの腕で船を作ったからいいものを…別にこれも予想内の範囲だったかな。」

思いにふける彼の隣で、老婆は感謝の言葉を言い続けている。それを横目で見ながら、これで良かったのだろうか、とノアは思う。彼は二つの意味で微笑んだ。

「さあて…研究所が洪水に勝ったかどうかは不明だが…あの老人は、生き延びる事ができたのかな？」

「こりゃ一苦勞だな…。」

神に言われた『人間と同等の生物を創る』という使命を果たすべく、さつそくセロファンはそれに必要なモノを探っていた。研究所は壊れた、とはいえども、その研究所の中にあつた様々な物質の薬品ビンや機械部品などは水により流れ出ただけであり、ほとんどはまだ使えるものばかりだった。

「だいぶ広範囲に流されたようだ。でも、まずこれをやらないと…とんでもないことになる。」

ガレキを崩していきながら、一つ、また一つと物資を拾っていく。今は何も考えずこの行動をとっているそんな彼にも、多少は計画があつた。

（ひとまずは、生物に必ず必要なタンパク質などの物質を手に入れておかないと。次に、今現在生き残っている中で特に頭のいい、人間に近い生物を採取する。それに、おそらく僕になるだろうけど人

間のDNAを入れて、物質で調節して改造すれば、どうにかなるはずだ。もちろん確信はできていない…でも、100年たって長いよ  
うで短いんだ。時間を無駄には出来ない)

一方、もう一人のセロファンも四苦八苦中。

「こりゃ困った事になったな…。」

歩いてきたのはいいものの、彼はあることに気付いたのだ。

「生きるすがすがしいものがない。食う寝るところは問題ではないが…重要なのは、食料だ。洪水に流された食べ物など、衛生的ではない。となると…」

セロファンは立ち止まった。彼の目線の先には、しずくが反射して輝いている、一厘の雑草が。彼は息を飲む。

「た、たしかに、食えん事もない…私とて科学者だ。食べても安全かぐらい分かる。おまけに簡単な調理法までだいたい知っているが…これを…口に含めというのか？」

だがあたりを見回すと、選択肢が限られていることが分かり、な  
んともいえない顔をする。

「ああ…皮肉なもんだ。これが…『悪』に対する天罰なのか？…自業自得ということなのか！？」

「これで、今後数十年は大丈夫だろう。」

そんな中、特に心配事のない人間が一人。

「箱舟を大型にしてまで、食料になりそうな動物を連れてきたか  
いがあったな。繁殖させていけば十分にもつはずだ。」

ヴィファリアス・ノアは、建物の残骸で新たな住居を創ろうとし  
ている人たちをみながら、ただ独り言を言う。

「人間の繁殖の方も…また、一からのやり直しか。まあいい、文明  
を生きた技術のある私たちにとって、敵ではない。」

「……は？」

なかなかうまく見つからない薬品、及び使えそうな物資を探しながら歩いてきたセロファン青年は、かなり遠くまで来ていた。

「……洞窟？」

そこにあつたのは、山壁にすっぽりと開けられた穴であつた。彼の言葉の通り、見かけからは『洞窟』といえるだろう。しかし、彼はそんなものは見たことがない。首をかしげるセロファンの足の近くには、大量のガレキのかけらが。

「……建物で隠れていたのか？でもどうして隠していたんだ？」

その疑問を解き明かすべく、ひとまず彼はその洞窟の中に入ってみる事にした。

洞窟内は、明らかに人工的に掘削められていた。

「誰かが使っていたのか？それにしても、どうして……」

ずいぶん長く曲線の道を歩くと、そこにはドアが。おそらくここにも洪水が押し寄せてきたはずだが、それを無視するかのようになり輝いてる。セロファンは奇妙だとは思いつつも、その扉を開ける。彼は目を丸くした。

中は、彼のものと同等の研究所であつた。頑丈な扉が役立つのか、浸水による被害はあまりないようだ。

「一体……なんのために……いや、もしかしたら……」

部屋に置かれた真新しい薬品ビンは、人体に有害なものばかりだ。どれも効き目はいまいちだが。

「……僕だけじゃないんだ……この『夢』を追っていたのは……。世界中に、同じ欲望を持っていた人がいたんだ。でも……夢を叶えられたのは僕だけだ。」

確かに、彼が言いたい事は事実だ。だがそう思うと、なぜか喜びがこみ上げてくる。

「……そういえば、この世界はもう僕だけの楽園なんだ。じゃあ……こ

「こ、使わせてもらつよ。」  
後のザ・ブレイカーの本拠地であるサイエンサー基地の、彼の指令室である。

いつきに時間が経過するようだが、それから半世紀弱が過ぎた。ヴィファリアスのつくりし村は、順調に子孫を増やしていった。しかし元が元、いくら文明を築き上げていった人々からなる集落とはいつても、その生活は原始人に近い。また、そのせいか知能もやや低下している。

「ノア様、こちらをどうぞ。」

「ああ、すまない。」

彼に若者から差し上げられたのは、村でつくられた農産物だ。ノアは彼らを救った神のようなお方として讃えられ、今では長老になっていたのだ。だが、その中身はいまだ変わっていない。

また、半世紀前からまったく変化を見せない人もいる。

「ああ…これだけ同じような世界を見てみると、飽きてくるといふもんだ。」

いつまでもなく、不老不死の体を持つセロファンだ。ノア一行がいるはずの村を目指し歩き続けてはいるものの、文明がないこの世界ではどこまでいってもその手がかりが見つからず。方向だって勘にすぎない。この日はめずらしく果物の木を見つけ、久々の雑草以外の食べ物だ、とむさぼりかじりついている。

「時計もなければカレンダーもない。これでは、何年過ぎたかなんて分かるはずがない。だが…もうそろそろ、やつが『あの生物』を生み出すはずだ。」

「ああ…これが結果というものなのか…。」

見知らぬ科学者の研究所を使っている科学者が、ここにいた。意外と研究所は設備が整っていて、栄養になる実験用の植物もある。生活するにあたっては文句のつけどころがないくらいだ。彼はこの半世紀をほとんど『研究』という形で使ってきた。しかし、望んでいるものはまだできていない。変わったことといえば、セロファン  
の一人称が『僕』から『私』になった程度。

「…もう、半分使ってしまった…。これで、いいものなのか？いや、そんなはずがない。だが…」

彼はうつむいた。

「もう、私に力など…成功に終わらせる目処など存在しない。…ええい、こうなったら！！」

突然セロファンは動き出した。絶望のあまり気が狂ってしまったのか、彼はやけになって再びあの物質を作ろうとしたのだ。

「私の人生だ…どう使おうが私の自由なのだ！なにが神だ！私を無にするだど！？やれるものならやってみるがよい！！」

誰にでもなく言い放すセロファン。無意識に体が動いているのだろう。しかし、化合物Xに使うの薬品の分量は、今となってはうる覚えだ。その上、その材料は珍しいものばかりのため、ほとんどが研究所内には存在しない。それでもセロファンは、かまわず目に入った薬品を適当に実験器具につっこむ。これでは、目的のものになるはずがない。しかし、それが思わぬ奇跡を呼んだのだ。それが、この後の世界を大きく変えることになるとも知らずに…。

## 第十一話 醜き怪物

「う…なにが…起きたんだ…」

その時、セロファンは研究所の床に横たわっていた。気狂いから覚めたのだろう。

「…さつぱり覚えていない…何をやったんだ…ん？」

彼は目の前の実験器具の中に、今まで見たことのない奇妙な『何か』があるのに気付いた。近づいてみると、それは人の形をしていて、まるで…。

「人間？いや、そんなはずがない。」

見たところ、体は灰色をしている。限りなく人型をしているが、人間、とはいえない。それに、とても小さい。彼は考えた。

「…化学反応によつて…生物が生まれたのか？たしかにこれは小説だ。そう考えるとありえなくはないが…本当に生物なのか？」

そうは言ったが、どう見ても人型の灰色の物体は動いていて、生きてるとしかいいようがない。とりあえずは、偶然による出来事だが成功への第一歩として、その喜びを味わった。

人間と同じように、生まれてきたばかりのその生物は赤ん坊同然だった。知能があるにせよないにせよ、それでは生態系も含めたもろもろを確かめようがないので、ひとまず彼は灰色の生物を人間で言う成人状態まで成長させる事にした。

「食べ物は何を与えればいいのか…」

悩んでいると、小人はセロファンの指の先へ。

「痛っ！！こ、こいつ！！」

それは、こともあろうに生みの親である彼の指に噛み付いたのだ。もちろん、幼児状態のその生き物にとっては分からないと思うが。そして生物は、噛み付いた跡から出てくるセロファンの血をその舌で舐めていた。

「吸血鬼…か。まあ、生き血は栄養もあり適しているといえは適しているが…仕方がない、生態系が分かっている以上、このやり方でいこう。」

それからというもの、生物は1週間ほどで等身大まで成長した。そこからはあまり大きくはならないが、ただ一ついえることがある。それは、生物は決して人間ではなく、『怪物』ということだ。それというのも、初めは小さすぎてよく分からなかったが、両腕に巨大な爪と細長い触手を持っているだいが気味の悪いものだったのだ。

「なにか、話せるか？」

「……」

さすがに1週間で言葉を話せるほど、頭のいい生き物ではなさそうだった。セロファンのも、たびかさなる『栄養の供給』でやや貧血気味。それを雰囲気で察したのか、次の瞬間、怪物はある行動に出たのだ。

「な、なんとということだ…」

怪物の体は徐々に変化していき、なんとセロファンと同じ形になったのだ。

「変態能力があったのか！？これは一体…」

人間へと変わった怪物は、口を開いた。

「ど…どうも…」

挨拶をするもう一人のセロファン。本物のセロファンと全く違うがない。

「…何をしたんだ？それに…お前は何者だ？」

突然の出来事のせいかわ、なんともいえない感覚に陥ったセロファンは、思わず単刀直入に尋ねる。

「自分でも…よく分からない。」

(そりゃあ、一週間前に生まれたばかりの新生物ではな...)。

セロファンは怪物に聞き入った。

「なぜ話せるようになったかはあえて問わないが...さっき、何をしたんだ?」

「ちよつと前からできそうだったんだけど...自分の感覚的に、なにかが出来ると思ってやってみたんだ。とりあえずは、目の前のあなたを見ながら、つまりなんとなく頭の中に入れながら...そしたら、こうなったんだ。」

彼はセロファンに見せようと、体を一回転させた。

「不思議だ...私とまったく同じなのか?」

セロファンは、偽者の自分の体に触れてみた。いつもは見えない自分自身の体だから、顔の表情などはよく分からない。しかし、皮膚とよい髪の毛といい、人間、それも自分本人にしか見えないのだ。

「真正正銘、人間になったようだな...今のところでは。元には戻れないのか?」

「ちよつと待つて...」

声にあわせるように、彼の体は元の形へと戻っていった。何回見ても、気色の悪い生物だとセロファンは思う。そして怪物は、再びセロファンへと変わった。

「...違う姿にはなれないのか?」

「やろうとしたんだけど...ダメみたい。一度なると、もう変えられないんだよ、たぶん。」

やや時が過ぎる。本物は、研究所の奥へと足を動かそうとした。

「ねえ...僕、どうしたらいいのかな...。」

「...しばらくは、私の『モルモット』になってもらうほか無さそうだ。」

「...分かった。できればやりたくないけど、この状況じゃあ...。」

セロファンは、久々に外の世界へ出てきた。空気が綺麗だ。

「神よ...これで、いいんだな?」

「おい、研究所の方に倒れないでくれよ。」

「分かってるって。」

セロファンの新たな研究所がある洞窟のそばには、一人の男と、数十メートルもあるドデカい怪物の姿が。

「変態能力の次は『巨大化』か…なんという珍獣だ。これではまるで、素人の書くつまらんSF小説だ。」

怪物に聞こえないように、小声でセロファンは呟いた。ほぼ同時に怪物は元の大きさに戻り、またセロファンの姿へと変わった。爪が少々危険なので、セロファンが『元態』と名付けたこの怪物の状態ではなく、人間状態の『人態』で普段生活をするようになったからだ。また、中身以外は完璧な人間なので、あの食事の手間も省けた。

「ああ…日光に浴びると気持ちいいね。」

大きく背伸びをするセロファンと、それを見つめ紙に記録をするセロファン。第三者から見ると、たいそうおかしな光景だ。

「セロファン、僕の仲間の生産はもうすぐかい？早く友人を作りたいよ。」

「あの時は何も考えず適当に薬品を入れていたが、減った分量を計測すればまた同じものが作れる。今、実行中だよ。一時間もすれば、数十体できるはずだ。それより、私じゃ不足なのか？」

「同じ種類の生き物だと、その時だけ分かり合える事もあるんだよ。」

「人間の体をしているくせに、何を言うんだ。」

二人は笑いあった。

「なんだか気分がよくなってきたよ。待てよ…またなにか、能力があるような気がする。」

「またか？じゃ、早めに見せてくれ。」

偽セロファンは歩いていき、再び怪物モード、そして巨人に。彼

は深呼吸をして、それを実行し始めた。次第に彼の体は、何かの見えるエネルギーで膨張していく。セロファンは、パワーアップが光合成でもやるのか、と笑いながら観察。しかし…。

「あ、アッー!!」

その瞬間、彼の体は光と化し、『爆発』を起こしたのだ。空気が赤く染まり、巨大な煙が辺りを包んだ。火花こそセロファンの方までへ飛んでこなかったものの、爆風により彼は洞窟の壁へ叩きつけられた。

「じ…自爆か!? こいつにそんな能力が…ちい!!」

失敗と後悔に悲しむ間もなく、彼は研究所内へと走った。

「君たちは、壊された怪物…ブロッケン・モンスターだ。特に言葉の意味はない。」

数日後。何十体もの怪物が、研究所内に整列していた。

「私は、君たちを創った…いわば『創世者』だ。それを、忘れないでもらいたい。」

## 第十二話 急展開に注意

量産を進めていくと、ブロッケン・モンスターには色々な種類が存在する事が分かってきた。水中で生活する体を持つ『水生タイプ』や、地中での環境を最良とする『地中生タイプ』など。他にも様々な種類があった。もつとも全て、人態になってしまえば関係のないことだが。また、特に『悪性タイプ』なる、身体能力が総合的に高いものも。

しかし、元々偶然によつて生まれた生物である。いくら調べても、どれをどのようにすれば望んでいる種類の生物が誕生するかははっきりとは判明しておらず、セロファンも四苦八苦していた。そのせいもあつてか、モンスターのほとんどは第一号と同じような普通のブロッケン・モンスター、『一般性』であつた。

偶然、研究所にあるコンピューターに文明時代を生きていた数万人の人たちの戸籍・画像のデータが入っていて、モンスターの人態での形による『研究所内に数十体のまったく同じ老人』という状況は免れたのだった。

「ではセロファン様：我々はこれで。」

「ああ。何かあつたら、すぐに戻ってきて報告してくれ。」

あの研究所の狭さでは、現在モンスターに改築工事をさせているとはいえ、とてもモンスター全て入りきるようではなくなっていた。そのため、物資の探索等の『偵察』も踏まえて、モンスターたちの半数を外の世界に出させる事にしたのだ。

「少しは食料を持たせてやる。なあに、50年も人間の手付かずでほつたらかしてあるのだから、生活に困るような資源の状態ではないだろう。」

研究所には、セロファンの手助けを目的に何名かが残る事に。

「君たちは、我々人類と変わらない…優秀な生き物なのだ。全世界に繁栄し、文明を作ることなどたやすいものだろう。では、頑張っ

てくれよ。」

「一時はどうなるかと思ったが…どうやら、無事成功したようだな。」  
「天空から見下ろす神は、微笑んでいた。」

「残りの寿命はどうするのですか？」

「寿命？」

「このことのための1000年なのでしょう？もう事は済んだのですし…。」

「今すぐ殺せ、というのか？」

「何をしても悪人に違いはないと思いますが。」

少々考えてから、神は答えを出した。

「この際だ、やつにくれてやろう。」

「なぜです？」

「あの男は、自分の努力で与えられた半分の年月のみで使命を成し遂げたのだ。皮肉ではあるが…それに対する褒美としてやろう。あの生物も、人間以上のものの可能性があるしな。」

それからというものの、時が経つのは早かった。およそ50年間の間に、ブロッケン・モンスターは日本中に散らばっていったのだった。集団で村をつくるものもいた。元々研究所という近代的な場所で育つたため、小さな文明をつくり、船で別の大陸に行こうとするものも。研究所からの新しいモンスターの進出も止まる事がなく、どんどん人数は増えていく。また、モンスターには生殖機能はないが、人態同士で完璧な人間の子供を作ることもあった。

一方、ノアのつくりし村も生地を拡大していた。一時は原始的になったが、再びそれが回復し文明が始まるうとしていた。しかし、全てがうまくいくことはなかった…。

「そ、それは…」

「黙れ！私のほしいものを私が手に入れる、これが悪いとでも言うのか！？」

マントを装着した悪面の男は、商業をしている民家で貴重な品物を奪い取るうとしていた。

「やめてくれ…それを盗られたら生きていけないんだ…返してくれ…」

だが、男はそれを無視して物と供に立ち去っていった。商人は力を失った。

「なんとという男だ…レイク・ザーズめ…」

「レイク様、御用はお済みになりましたでしょうか？」

物資を抱えながら、レイクはその住居へと帰ってきた。迎えたのは数十名の彼の子分、話しかけたのは側近の男である。住居内にあるこの部屋は宮殿の王室のようにも見える。

「人民に力を無くせば、彼らは私に従うしか道がなくなるはずだ。

私が自ら行動に出たのも、彼らに『ザルラー』の恐怖感を与えるためだ。夢は順調に進んでいくだろう。」

彼は笑いながら言う。そして、なにかを思いついた。

「私はまた席をはずすとしよう。」

「どのような目的で？」

「作業は、部下共に任せればいい。私は…しばらく遠くへ行く。物資の探索だ。」

「そんなこと、レイク様がなさらなくても…」

「私に逆らうのか？」

君主にそう言われ、側近の男は口を閉じてしまった。

「いいのだ…少しは楽しませてくれ。」

ちょうどその頃、今で言うユーラシア大陸の中央地域の海岸線に一隻の船が来ていた。そして船から一人、いや一体の怪物が出てき

て、なにか嬉しい事があつたのか大きく万歳をした。

「船で遭難をしながらも航海を続けた結果…とうとう私は大陸にたどり着いたのだ！！私はこの大陸でたった一人だ！！自由だ！！ヤッホウ！！」

喜びを隠せないモンスター。しかし、その時彼の目に小さく入ってきたものは…。

「…ん！？…なんじゃこりゃあああああ！！！」

そこにあつたのは、彼からしてはとても信じがたい『村』の姿だった。お粗末ながらも建物らしきものがあり、市場らしきものもある。「嘘だろ…村なんてそんな…ブロッケン・モンスターでここに来たのは俺が初めてのはずだぞ！！」

そうは言っても、真相を確かめようとその場所へ近づいていった。だが、そこにいた『人間』の形をした生き物は、彼を見るなり悲鳴を上げて逃げていく。

「おい、なんなんだよ…俺より先に来たなんて聞いてねえぞ！！それよりなんで逃げるんだよ！！！」

「これは…」

同じくしてレイクは、ある場所へ来ていた。

「この村々の始まりとなつているノアという長老が…大洪水を予知して製作し、生き残るのに使った『ノアの箱舟』か。なんと奇妙な経緯のある物体だ。」

地面に置かれた船は手入れがされていないようで、草が茂っていてツルが延びている。

「…中に見えるものがあるかもしれない。少し探ってみるか。」

彼は船内へと入っていった。ろくなものがない。諦めて外に出ると、船底に何かが引っかかっているのに気付いた。

「紙切れ…か？チラシでもはさまったようだな。」

特に期待はしていないが、それを手で取ろうとした。強く挟まっ  
ていて上手く取れない。レイクはムキになってそれを掴み、取り出  
した。年月の経過のせいで色あせているが文字が書いてあったので、  
彼は読み上げる。

「大洪水…計画書？」

「もうじき、迎えが来る頃だな。まあいい。最悪は避けられたから  
な。」

数カ月後。セロファンの研究所は基地のようになっていた。部屋  
には、めずらしく彼一人だ。

「安らかに死ぬるといいのだがな…。」

その時、扉が開いた。走ってきたのはセロファンの側近をしてい  
るブロッケン・モンスター。つい数時間前、用があるとの事で部屋  
を出て行った。

「セ、セロファン様…とても重要な報告があります…ハアハア…」

「なんだいきなり…ああ、申したまえ。」

走ってきたほど大切な事を伝えようとしているのだろう。彼は憤  
重に言った。

「セロファン様、いいですか…心してお聞き下さい。」

セロファンは息を飲んだ。そして、モンスターは口を開く。

「人間が…いたのです。」

### 第十三話 神からの褒美

「君たちの活躍は、ただ素晴らしいばかりだ。」

その頃、世界征服をたくらむ悪の組織『ザ・ルーラー』の本拠地的建物の中では、その首領であるレイク・ザーズという悪党を灰色の怪物が囲んでいた。

「いく月か前、君たちはこの大陸を訪れ、初めは近寄りがたい存在だったが次第に『人間』として暮らし始めた。その内、私に侍従しザ・ルーラー、すなわち私に奉公をしてくれるようになった。そのおかげで、この組織を大きくすることができたのだ。世界征服の鍵も握め、じきにそれは実行されるだろう。」

そう言うのと、彼は指を鳴らした。その音に応じて、一人のプロツケン・モンスターが無駄にでかい機械を扉から出してきた。

「大洪水計画：誰だかはよく知らないが、過去に『世紀の大洪水』を引き起こした人物がいた。そして、私は運よくその計画書を手に入れたのだ。物質を製作するための、精巧な実験器具も技術のある君たちが作ってくれた。あとは、材料を入れるのみ。再びの悲劇は、私の理想と化すのだ。ハハハハハハハハ……」

「人間がいただと！？そんなはずが……」

「嘘ではございません。」

驚きの真実を聞いたゼロファンだが、まだそれを信じられない。

「話の伝わりが遅すぎて申し訳ないのですが……つい数ヶ月前のことだそうです。新たな土地を目指そうと船に乗ったある者が、結果西の方角にある大陸に到着しました。しかしそこには……やつらがいたのです。」

「……どうなっているのだ……みんな死んだはずだぞ……！」

「そう言われましても……こういうのも失礼ですが、場所が場所なのでいくらゼロファン様でもこの世界では、知っていないのは仕方の

ないことだと思えます。話によると、ノアという謎の男が大洪水を予測したのか、箱舟をつくってそれで生き延びたそうです。船にはノア自身の他に知り合いなどの数名、そしていくつかの動物を乗せました。その後人類はノアたち数少ない生存者によって繁殖し、その生息範囲も少々拡大。同時に多少の文明が発達しているようです。

セロファンは床にひざまずいた。

「じゃあ…嘘だったのか…」

彼は小さく呟く。

「神よ…お主は言ったな…人類は滅亡したと…だから私に100年の寿命を与え、元に戻そうとした…。しかし、人類は完全に消え去った訳ではなかったのだ…この…私の…苦悩は…」

気が付くと、彼の視界はどんどんぼやけていった。前回のセロファンの予想が当たり、例の時間が来たのだ。

「これで…終わらせて…たまる…か…!!」

「神よ…あなたは間違っていたのだ!!」

再び冥界に來た悪党にして科学者のセロファン・フリーザン。彼は神にそう叫んでいた。

「人間は生き延びていたのだ…それなのに、あなたは私に使命を下した。たしかに、それに賛成したのは他でもない私だが…この魂の老い、そして数々の苦悩をどう対処してくださるのですか!!」

神は手を目にあて、悩んだ。

「それは悪い事をした…しかし、この広い空間でたった数人の人間を発見することの難しさを理解してくれ。」

その言葉にも不満のあるセロファンは、なおも神を見つめ続ける。神は、このままでは最高の位にある者としてまずいと、何かをしようと思った。その時天空から目に入ったのが、セロファンに言われ

てつい先ほど見つけた人間の集落。数割は完全な人間ではなく『怪物』だろうが、その中で一人の男の姿が目に入った。しかしこれは、神の思考に大きく影響したのだった。

「…つまり…貴様は、人間が現存しているのに関わらず…新たな生命体、それも人間と同等のものを創り上げたのだな？」

ゼロファンはうなずいた。

「そうか…よし、ならば褒美をやるう。」

「褒美？」

「そうだな…不老不死の体だ。不死身とは違うが、健康的に過ごせば老衰によつて死ぬ事はなく、また体がこれ以上衰える事もない。永遠に生き続けられるのだ。」

「永遠…に？」

「ただし、条件というものがある。先ほどの私の言葉から分かる通り、人間と怪物、この二つがたとえ一つだけでも共存していなければならぬ。どちらかが死に至った場合、不老不死の体は無くなり老いて死ぬはずだ。両者の死は…以前言ったのと同じ。」

「無になるのか…では…仮にそれを決行したとしたら、この老いた状態からの『不老不死』か？」

「不満ならば、別の方法を考えよう。私としては、一番の解決方法なのだがな。」

いきなりの重大な選択に、一分ばかり彼は考える。神が自ら言うてくれたことなので、みすみすチャンス逃すのはもったいないところ。そして…。

「よし…それを受け取ろう。しかし、そんなことが出来るのか？」

「ああ、出来るとも。今だけはな。一石二鳥、だ。」

「…？」

その時言った神の最後の語句が気になったが、彼は神の質問に対し二つ返事でイエスと言ったのだった。

一方、ある男のところには不幸が訪れようとしていた。そう、あ

の男のところだ。

「うっ…どういうことだ…」

「レイク様、どうなさったのですか？」

第二の大洪水計画を始動させようとした時に、その男には原因不明の出来事が。

「分からない…ただ…体が突然…」

レイクは突如体に異常をきたし、倒れこんだ。

「そんなはずがない…私は健康で…悪党で…」

「レイク様…」

「夢を成し遂げる男なのだよ…!!それなのに…なぜこのようなことが…」

彼は目を閉じた。

「無念だ…こんなことが…あつていいはずがない…私は必ず…また理想へ近づくぞ…!!」

その瞬間、レイクは謎の死を遂げたのであった。

「セロファン様…セロファン様!？」

「うっ…」

突然、一度死んだはずの怪物の創世者は息を引き返した。

「セロファン様、どうなさったのですか!?!?つい一時間ほど前、確かにセロファン様は息絶えたはずなのですが…」

自分の言っている事がおかしいとは思いつつも、側近の怪物は説明をした。

「ああ…話をすると長くなる。要するに、私は甦ったのだ。それも不老不死の体でな。」

「…よく分からないのですが…不老不死、ですか?作り話ではなく?」

「この私の存在そのもの現実だ。分かるだろう？」

「はあ…。」

訳も分からず、怪物は事態を伝えるために去っていった。

「どうしたんだ、レイク様は？」

レイク・ザーズ親衛隊なる三体のブロッケン・モンスターがようやく事件を駆けつけて、ここに来ていた。

「なんとというかその…死んだのです。」

「…死んだ！？そんな馬鹿な。あんなに元気だったのに…」

「私としても、なぜ今に続いているのか理解できません。ただ…レイク様は死にました。」

「そうか…くそ…」

自分たちが親衛隊ということもあり、三体は悲しみを覚える。

「こうなったら…レイク様の信念を貫き通すべく、計画の実行を…」

「ダメです。物質のことを知っているのはレイク様のみ…計画書は償却されたのですぞ。」

## 第十四話 禁じられた遊び

「さあ…これからどうするか…」

なにより、今後の人生が『永遠』となったのだ。やりたいことはたくさんある。そう、セロファンは悩んでいた。

「とりあえずは死の危険は消え去った。神の言った通り、ブロッケン・モンスターと人間の共存さえあればいいのだ。従って…両方の生存を脅かす事、以前のような…世界征服といったものは避けなければ。」

そうは言えども、何もせずにこの長々しい時間を過ごすのは勿体無い気もする。モンスター開発時とは価値が異なっているが、『時間は大切』という考えは変わっていないはずだ。

「そうだな…しばらく夢を遠ざける今…私が欲しているのは…娯楽だ。」

その時、目に入ったのは元研究所に立ち並ぶブロッケン・モンスターたち。

「…よく考えてみれば…こいつらは私の化身なのだ。創世者であるからこそ、絶対に従う。いや、従わざるを得ない。私は…彼らにとつての『神』に等しい存在だ。つまり…」

誰に言うのではなく、自分の言いたい事をまとめる。

「私の命令には逆らえない。」

そう言つと、彼は側近を呼んだ。それに答えて、近寄る灰色の生物。

「何か…御用でしょうか？」

「全国から、仲間をできるだけ集める。伝えたいことがある。」

「…何を…するのですか？」

質問され、彼はにやりとして答えた。

「趣味の時間だ。」

数日後の深夜0時ごろ。人間のつくりし村の中心には、長老の住む住居があった。そう、ノアは村人からの熱い奉公のおかげもあり、人体の限界に挑戦するかのように未だに寿命を延ばしていたのだ。健康状態は良好、1年に一回ほど風邪をひく程度。もう長くはないし、いつポツクリいつてもおかしくないのは確かだが、彼は健在であるのだ。

「…ん…何者だ…？」

彼の寝室には、怪しい物影があった。老いたせいかよく眠れていないノアは、それに気付き声をかけた。

「ここは長老の家だ。許可無く入る事は大罪だぞ。」

そして出てきたのは、爪をむき出しにした怪物の姿だった。

「おい…その物騒な姿はやめろ。村の掟でも決まっている。…おい、冗談だろ…」

彼の呼びかけを無視し、怪物は近づいてきた。巨大な爪が向けられた。

「よしてくれ…私はなにも悪い事はしていない…や、やめてくれ…命だけは…アッー!!」

しかしその時は既に、怪物の爪はノアの体を貫通していたのだ。

同じことは、村の別の場所でも行われていた。

「助けてください…一体何の恨みがあつて…ギャー!!」

老若男女問わず、いくつもの人間の体が血で染まっていった。それを実行している怪物にためらいの心は無い。冷酷に殺人を進めていく。そんな中、腕を上げながら指図をしている『指揮官』らしきモンスターは、もう一人のモンスターに尋ねた。

「この村の一掃は順調か？」

「ハッ！この調子でいきますと、あと30分もあれば完了であります。」

「よろしい。」

「終了し次第、隣の村にとりかかります。」

「いや待て、それはよしておけ。」

勢いで話すブロッケン・モンスターを止める。

「自分の頭だけで考えるな。今はセロファン様からの新しい指令を待とう。遂行はそれからだ。それに…セロファン様はこう言っておられたのだぞ。」

だんだん静まり返ってくる村を見ながら、彼は言った。

「全員は殺すな、と…それを絶対に守らなければならないのだ。…勝手に動く訳にはいかんだよ。あくまでもこれはセロファン様からの命令なのだ。我々の独断行動ではない。」

「セロファン様、進行状況の報告が入りました。」

「距離の割には意外と早いな…。まあいい。あくまでも小説、海の使用は消しておくでしょう。」

数字の書かれた紙を渡す。それを見て彼は笑顔を隠せない。

「ほう…素晴らしい。これでこそ、私の子供たちだ。」

紙を返し、以後も期待しているぞ、と言う。

「ひとまずは退却させる。明日になってから、目標を別の村へ移す。」

「伝えておきます。それとセロファン様、一つお聞きしたい事があるのですが…」

側近は会話を疑問へと変えた。

「セロファン様は…命が尽きる『一瞬』を好んでいると言っていたと思うのですが…その言葉を正すには、今のようになんか報告を聞くだけではなく、セロファン様自身が現地へ足を運んで、その『一瞬』をお目にかかるべきではないのでしょうか？」

「つまり、言っている事とやっていることが矛盾していると言いたいのか？」

「そういうことになりますか…。」

セロファンは立ち上がり、先ほど返した報告書を再び取り上げた。「報告がある、人間が死んだという事実がある、ということとは…私の好きな『一瞬』が存在している事を提示しているようなものだ。たとえそれを目の当たりにしてなくても、その事実を知るだけで私は愉快だ。…もし私に反逆しようものなら、貴様といえど万死に値する。よく覚えおくんだな。」

人間の殺戮は一週間ほど続いた。海を隔てた日本、その南北の中央に位置する後の『東京』では、報告を聞くたびにセロファンは気分を向上させていた。

しかし、この行動に疑問を持つ者もいる。

「なんで人間を殺すんだ？彼らに罪は無い。」

「仕方の無いだろう。セロファン様のご命令だ、逆らえない。」

「そのセロファン様だって人間じゃないのか？彼にも人情つてもものがあるだろ。」

このような会話が飛び交い、それがセロファンの耳に入る事もたびたびあった。

「しかし、セロファン様は我々ブロッケン・モンスターを創ってくださった、偉大なお方なのだ。それに…彼が何をしているか分からない。」

「どついう意味だ？」

「風の噂なのだが…セロファン様は新たなモンスターを生み出すときに、その体に爆弾を埋め込んでいるという話だ。」

「マジか？」

「詳細は不明だ。だが、もし誰かがセロファン様の機嫌を損なうような事をすれば…」

「すれば？」

「…スイッチ一つで爆発だそうだ。」

彼らは知らないが、もちろんこんなこと根も葉もない嘘だ。

「しかし…これだけは言えるだろう。彼は我々の創世者であると同時に…我々のことを一番良く知っているのだ。いざという時、我々を殺す可能性は大きくある。」

だが、人間側も黙ってはいなかった。

ここはとある村。100年前の洪水の被害が比較的少なかった事により、流れ出た機械類を利用して商工業がさかんになっていることとで有名だ。しかしここにも、怪物による人間の虐殺が、どんどん近づこうとしていた。

「ちよつとお邪魔するぞ。」

一軒の住居の中に、一人の男が入ってきた。住居の中には、もう一人の男がいる。家の住人だ。家の中には多数の機械が置いてあった。

「たしか君が…ポルターガイスト博士ですよね？」

「…誰だてめえは…」

中にいる中年の男性は、機械をいじりながら反応した。

「…勝手に人の家に入ってきてその態度か？人として挨拶ぐらいはしてもらいたいところだな。」

「それはすまなかった。」

反応はするが顔は向けない男に対し、彼はお辞儀をした。

「私はステイツフマン。そうだな…ステイツフマン大佐と呼んでくれたまえ。」

## 第十五話 人間の意地

「何故に『大佐』なんだ？」

「そこはつつ込みを入れないでくれ。説明に3話ほど必要だ。」

「ふうん…で、その大佐がこの俺に何の用だ？」

機械を見渡した後、ステイツフマンは言った。

「力を貸してくれ…怪物を倒すんだ。」

「…なんだって？」

「話は聞いているはずだ。私は別の村から来たのだが…ここに来てから聞くのは、ほとんどそのことだ。もうじきやつらは来るだろう。」

「俺には関係のないことだが。」

「君も殺させるはずだ。そうだろう？」

「だからなんだ…じゃあなにか？村の中でも特に技術のある俺に…対抗策を練るつてののか？」

彼はこくりと頷く。それを横目に、呆れた口調でポルターガイストは言った。

「言うておくが…俺に『博士』なんて呼ばれるような優れた能力は無い。従って…怪物共を倒すなど、不可能に近い相談だ。この村は幸い、まだやつらが移住しておらず、さっきあんたが言ったように策を考える時間がある。村人の何人かは、それを必死でやっているだが…俺は協力する気は無い。」

「なぜだ？仲間を救う、それだけのことだ。」

「自信が無いんだ！」

いきなり彼は怒鳴った。

「俺に力なんて無い…もし俺が何か考え、それを施行したとする…でももしそれが失敗したら…俺は責任を取れないんだ。自分のことでさえ充分にできない俺に…仲間を助ける資格はない。」

それを聞いて、ステイツフマンは、近くにあったイスに腰を掛け

た。

「私とて…必ず上手くいくなんて思っていない。現に、既に怪物の餌食となった他の村の中には、たくさんの人が戦った、にもかかわらずそれを止められなかった村もある。」

「それなのに、今あんたは…」

そして、なぜかステイツフマンは勝手に話し出した。

「つい先日…私は殺された。」

「は？」

「いや、私の家族は殺された。一瞬だった…村に住んでいるモンスタ―が、とうとう行動しだしたと聞いてから10秒も経たない間に…刺客は私の家に入ってきた。抵抗したがすぐに、妻と二人の子供が殺されたのだ…。それが終わったらもちろん私の番だ。しかし、運よく怪物の自前の武器は急所をはずした。…それから、必死で逃げてきたんだ。」

そう言うと、衣服をチラッとめくった。腹部に包帯が巻かれているのが見えた。

「これ以上…死というものを創らせたくない。だから…戦うんだ。」

真夜中の村中。音一つ無いこの空間に、やつらはやって来た。一人の村人がそれを見て、足音に注意しながら村の中心部、『集会所』なる集い場へと移動した。

「とうとう来たか…大丈夫だ。死なせはしない。」

報告を聞いたステイツフマンは、隣にいる中年男性に合図をする。責任は…取れないからな。」

「いい加減、自分を過小評価するのを止めたらどうなんだ？少なからず可能性はあるんだ。それに…」

彼は一瞬ためてから言った。

「博士は最高の発明家だ。」

同じくして、作戦のため元態に変態したモンスターたちは、村の中へと侵入していった。

「あと10、9、8、7、」

住居の物陰から、一人が数を数える。どうやらどんどん小さくなっていくモンスターとの距離を、誰かに伝えていているようだ。

「6、5、4、…」

怪物たちは、これにまだ気付いていない。

「3、2、1…今だ!!」

村人は声を上げた。同時に、建物の裏から何人も男たちが現れた。その中で一人、技師のような男の手元には、機械のような『何か』があった。彼はスイッチを押した。

「人類の栄光を…やらせはしない!!」

「セロファン様、大変な事になっています!!」

慌てて走ってきたのは、言わずと知れたセロファンの側近である。

「な、なんだというんだ…」

「人間が…反抗に出たのです!」

そう言って、報告書をセロファンに差し出す。

「ぜ、全滅!?あの数のモンスターたちが全滅!?たった一つの村の人間共にか!?!」

「は、はい…なんでも、人間が怪しげな機械…いわゆる『兵器』というものを使ったそうです。」

「…なんとということだ…やつらは退いたのだから!?え!?!」

「それがその…私が聞いた限りでは…セロファン様の命令を守り通す一心に、次から次へと仲間を導入したそうなのですが…」

「で、それはどうなったのだ!?!…まさか…」

しかし、側近は顔をうつむかせるだけだった。

「…人間め…小癪な真似を…」

「やったな、博士！」

「おうよ！」

万歳をする二人。この数分前、人間は、初めて怪物に勝利したのだ。

「全ては、博士のおかげだ。これで自分の能力の高さが分かっただろっ？」

「ああ…そう、俺は天才発明家、ポルターガイスト博士だ！！もう敵なんていない！！！」

思わず調子にのるポルターガイスト。この時から、彼の子孫の性格が『過小評価』から『自画自賛』に変わっていたのだろうか…。

「ありがとう…これで村は救われた。本当にありがとう。」

村の長らしき人物は、顔をしわくちやにして感謝の言葉を述べた。「ひとまずはやつらは帰った。だが、またやってくる可能性もある。油断は出来ないようだ。」

「そのようだ…そういえば、どのようにして怪物をなぎ払ったのだ？」

「簡単な事だ。」

博士は説明を始める。

「見た目から、モンスターのは水分が占めていると推測した。だから、そういう体質にきく『電流』ってのを放流したまでだ。もちろん初めは一か八かだ…理論は正しいとしてもどんな体かは知ったこっちゃない。俺には出来るのだよ、そういうことが。それに、この村だからこそ可能だった訳だ。」

自慢げに彼は話し続けた。

「巨大化しても話は同じだ。資源のおかげで機械は大量にあるからな。」

彼が指を鳴らすと、待ち構えていたように村人たちが機械を持って歩いてきた。

「まだ被害を受けていない他の村にも持って行って、撃退させてやる。そうすれば悲劇は二度と起こらないはずだ。」

そう言った後、彼はスティッフマンの方を見る。

「あなたのおかげだ。自分を信じること…きちんと教えてもらったぜ！」

それからというものの、この村から始まった『対怪物兵器』というブツは大陸中に広がっていった。これにより、人間はブロッケン・モンスターよりはるかに優位になるかと思われた。が、これに對し動いたのは今度はモンスターの方だった。セロファンからの命令に従いながらも、自分たちでそれを考えて行うようになった。彼らは彼らなりに策略を考え、実行した。知能こそ人間よりやや劣ってはいるものの、同等の生物に変わりはない。

そして人間と怪物が衝突した結果、どちらも負けず劣らず、引き分けの状態となったのだ。つまり、どちらかの誰かが死ぬ、ということは一切起こらなくなったのだ。

一方、反抗の始まりとなった例の村の住民の内何名かは、危険だとは分かりつつも、できるだけ怪物の侵攻を防ごう、ということ、船で『怪物が誕生しているという島』へ向かうのであった。

## 第十六話 進路変更

「カリウマン：今日も報告は無しか？」

「え、ええ。なにしろこの状況では…。」

大きくため息を吐くのは、セロファンである。

「私は時間を最大限に使う主義でな。…こんなつまらない毎日にはうんざりだ。」

彼は軽く怒鳴った。

「私は戦略家ではなくてな。また人間を上回る勢力にする作戦など思いつくものか。その上、ブロッケン・モンスターは偶然により誕生した生物。悪性タイプこそ存在するものの、そう簡単に能力を強化できるはずはない。生態系でさえ全て解明されたわけではないのだ。」

「そう言われましても、私どもには何も…。」

「どうにかしろ！私に退屈させるな！何をしてもいい…人間を再び倒す、死を創るのだ！…ん？」

その時、セロファンの頭の中を何かが走った。彼はそれを高スピードで考察する。

（そうか…別に人間でなくてもいいのだ。同じ『死』なら怪物でも…）

やろうと思えば簡単なことだが、自分で作った生物を自分で殺す、ということは皮肉にも思えた。それに加えて、ボスに裏切られた部下たちが起こす行動もなんとなくだが予想がつく。決していい想像ではなさそうだ。

（だが、こうやって時を無駄に過ごすのは気に食わない。危険だが…やってみる価値はある。いやしかし、どうすれば…）

彼は頭脳をフル回転させた時だった。

「セロファン様、ちよつと…」

扉が開き、情報収集を担当しているモンスターが、何かを知らせて来た。

「…？」

「ああー、ここもけっこういい所じゃねえか。」

あくびをしながら、中年男性は呟いた。それを見ながら、別の男が言う。

「無事島に到着しただけでも、奇跡のようなものだ。では、早速探索を始めるとしよう。」

二人を含めた何名かは、海岸線から内陸へと歩き始めた。人間より数が少ないモンスターだけにしか使われていない場所だからか、資源は豊富にある様子だ。放置されている、というより世紀の大洪水で流されたままの機械を見て、少々胸がわくわくしているポルターガイストは、大佐なる人物に話しかける。

「サイエンサーの住処はどんな感じになっているんだ？」

「サイエンサー？」

「あの怪物のことだ。船で揺られながらなんとなく思いついたんだ。いいセンスしてるだろ？」

「あ、ああ。以後彼らの事をそう呼ぶとしよう。で、そのサイエンサーの村をどうする気だ？」

「破壊するんだ。」

「破…壊？」

彼の言葉に、ステイツフマンは戸惑った。

「だってそうだろ？いくら今活動をしていないにしても、俺らの…大切な仲間を奪っていったのに変わりはない。やるなら力を失いかけてる今がチャンスだ…復讐するんだよ。」

「…駄目だ。」

「何故だ！？あんただって…恨んでいないのか!？」

ステイツフマンは立ち止まった。

「私だつて…許したわけではない。しかし、あくまで彼らとの中和状態、平和な世界を望んでいるだけだ。争いは争いを呼ぶ…だからこそ…水を差すようなことはしたくない。惨事は繰り返したくはないのだ。」

「…そうか…俺が間違っていたようだ。変な案だして悪かったな。」  
軽く誤る博士。

「いいんだ…ともかく、我々がすべきことは…サイエンサーの本拠地ともいえるこの地でいち早く動きを察知し、世界中へ危険を知らせる。それだけだ。つまり…」

「大佐！！」

遠くから割り込んできたのは、一緒に来たうちの一人である。しぶしぶ彼はそれに応えた。

「…たく…なんだというんだ！！」

「…それが…不審な人物がいるのですが？」

「不審な人物？」

ステイツフマンは、急いで駆け寄った。そこには、船で来た人たちに囲まれた、一人の老人が。

「大佐、気が付いたら我々に紛れ込んでいたのですが…こんな老人…船に乗せましたっけ？」

「記憶にないな…私は船の針路の方をやっていたからな。」

うずくまる老人の顔は酷く汚れていた。しかし、やや文明人のような面影もある。

「乗っていたんだろ。なあ？」

彼は一人の老いばれに話しかけた。老人は何も話そうとしない。

「大佐…私も見たことがあります。もしかしたら、元からこの島にいたのでは？」

「何言ってるんだ。島に人間の生き残りがいたなんえ話聞いたことがないぞ。大陸のほかの人間が既に島に移り住んでいたなんて報告も知らされていないし…サイエンサーの村ももう少し遠くのはずだ。」

「…そうですか…チツ。」

自分の考えが否定されたせいなのか、男は機嫌を悪くした。一方ポルターガイストは立ち上がる老人を見て、科学者の雰囲気があるな、とふと察するのであった。

同じ頃、島の別の場所では。

「セロファン様は…これがなんなのか知っていられるので？」

「当たり前だ。それにしても…素晴らしいものを見つけてくれたのだ。」

彼は驚きを隠せなかった。

セロファンがいるのは、基地からやや遠い鉱山だ。そこにあるのは、光り輝く緑色の物質。

「このマ・タベ鉱山を物資探索のために掘り進んでいた者が偶然発見しましたね。今のところだとこれで全てなのですが…お役に立てましたでしょうか？」

「ああ、大助かりだとも。これは…いいものだ。」

そんなセロファンは、やけににやけていた。

（エナジーロツク…様々な用途のある万能な物質だ。高度な機械を作るには不可欠であり、私も多く利用していた。なにしろあの物質Xにも使用するほどだからな。それにしても…）

そほど多くはないものの、自分の要求を満たすには充分あるだろう。

（元々文明があった時もそれほど大量に発見されたわけではなかった。それでいて海水と相性が悪く洪水によりなにもかも消滅してしまったと思っていたのだが…なんとという奇遇だ。これさえ手に入れば機械が作れる。そして…人間への加勢が可能だ。）

（もう…こんな時期か。）

久しぶりの登場。忘れたかもしれないが、一応はこのストーリー

の主人公的存在、未来から来たしゼロファンだ。

（この頃になると、もう一人の私はあの…機体の開発にはいるはずだ。私もようやく帰ることが出来そうだ。）

いくつもの苦難を抜けてきたゼロファンだが、まだ全てが上手くいくという自信ばかりではなかった。

（もう少しだ…もう少しで、元の世界に戻ることが出来る。私は、目標を達成させる全ては…結果なのだ。）

大陸の人間が島へ移住しに来てから約1年。島では新たな『村』が誕生しようとしていた。途中幾たびか人間と怪物の衝突があったものの、現状では無くなっている。冷戦状態、ともいえる。

そんな中、現在の東北地方で、怪物たちによるある話し合いがなされていた。

「おい、冗談だろ…死に行くようなもんだぞ。」

「何言ってるんだ。噂ではああだが…首領はただの人間だ。絶対に。」

一人の怪物は、なにかを企んだ顔で話す。

「やつのいいなりになりたくはない…だからこそ、これを計画するのだ。全ては自由のため。開放されるためだ。協力を頼むぞ…『ゼロファン・フリーザン暗殺計画』のな…。」

## 第十七話 今も昔も資源は大切

「ああ…案が見つからん…」  
セロファンは悩んでいた。

怪物ではなく人間への加勢、ということでは救いの手を差し伸べるかのように発見されたエナジーロックスを使って、過去に人間が作ったような『兵器』を開発する事になったのだが、未だにそのアイデア、すなわち具体的な計画、なにを作るのか、ということについてはまだ決まっていない。

「これから先、長い年月に使われるはずの兵器だ。エナジー・ロックスの量が限られている以上、失敗はできない。だからこそ、こうやって一年も思い悩んでいるのだが…」

だが、それは簡単に頭の中に浮かんで来るものではなかった。

「たしかに、アイデアだけの問題ではない。いくらエナジーロックスという万能の素材があっても、それだけでは兵器は作れない。かといって、研究所にあるものを使えというのは無理な話だ。」

そのため、彼は兵器開発を始めた直後、モンスターたちにある命令を出したのだ。それは…。

「て、敵襲だー!!!早く武器を持ってー!!!」

人間たちのつくりしある村に、突然サイエンサー、つまりブロッケン・モンスターが現れたのだ。彼らと人間の衝突後、戦力が互角になり双方とも押しも引きもしない状態になった結果、しばらくの間はサイエンサーが攻撃を仕掛けてくる事はなかった。つまり、久々の遭遇になるうとしているのだ。だが、今回は少しばかり様子がおかしかった。

「…ん?…なんだあいつらは…?」

変態していることに変わりはない。それについては、村の掟に背いていて罰を与える権利がある。しかし、彼らに戦意はなかった。

現れた怪物共は、村の周辺をあさっているだけなのだ。

「おい、何をやっているんだ？」

若い村人の一人が、あるサイエンサーに話しかけた。彼はそれを無視し、謎の探索行動を続ける。すると、彼はあるものを見つけた。何十年も前に起きたといわれる『世紀の大洪水』で流されたあとそのままの、機械の部品だ。サイエンサーはそれを手に取り、自分のものにした。

「…村長、こいつらは村の資源を盗って行くつもりですよ。どうしますか？」

その行動を見てやや呆れながら、男は言った。近くにいる村の長は答える。

「なんのつもりだかは分からないが…今はそのままにしておこう。」

「なぜ？村の貴重な資源ですよ？」

「資源資源うるさいな。元々この村には技術がないんだぞ。ものづくりの力がある村…たしか対サイエンサー用の兵器を発明したあの村よつなところでない限り、村に散らばるそれはゴミ同然だ。清掃処理をしてくれていると思えばいいじゃないか。」

「ですが…」

「攻撃はするな。無駄な争いは避けるべきだ。あくまでも、共存を目指す…それが、一番大切なことではないのか？そのためには、これくらいのコストを惜しんではいけない。」

「大佐、このような報告が入っているのですが…。」

数日後の、後の日本では。

「サイエンサーが物資の収集、か…特に与える行動は無さそうだ。」

「なにを企んでいるんでしょうかね？」

「さあな。だが、なにを考えてそれを行っているのかは不明だが…『やつらに戦う気は無い』ということは今のところだと言えるだろ

う。我々はただそれを見ているだけだ。後の祭りにならないといけないが。」

彼の答えに、まだ不満のある村人。

「…もうじき、兵器を生産している村にも来ると思いますが。そうしたら…どう対応するおつもりで？いくら戦いを望んでいないとはいっても、全てごっそりもってかれたら一大事です。」

「そうだな…よし、大陸の人間に伝える。怪物と同じように…『資源を集めろ』とな。ああ、それもこの場所、島にだ。」

「で、資源は集まったわけだ。少しばかり少ない気がするが。」

一部始終セロファンも知らない回想シーンが終わると、彼は再び本題に入る。

「ビーム砲でもつくる？いや、平凡すぎる。それに移動手段がないと、もち運びができない。戦車や戦闘機…だめだ。なにか、アクセントのようなものがない。そして、使いづらい。事故を起こして欲しくはないからな。となると…」

考え、なんとなく思いつく答えを口に出した。

「…ロボット…？」

だが、自分で言った事に対し否定の意見を述べる。

「いくらなんでも…そんなもの、私に創れるのか？たしかに、悪くは無い。斬新、かつ最適。しかし一機造るだけでもかき集めた資源をほとんど使ってしまうはずだ。…賭けるのか？その…機械人形に？」

迷っている時間はなかった。時間を無駄に出来ない、それが彼の主義だからだ。

彼はすぐに走った。基地内にある、彼の工房へ。機械の作業が出来る場所へ。

一方、セロファンと同じく世界中からありとあらゆる資源を取り寄せたスティッフマンらは、それを閉まっている場所にいた。

「もうタツシエには入りませんよ。元々地下に穴を掘っただけの隠し場所ですし…というか、なぜ隠す必要があるのですか？」

一人の村人が言葉を投げかけた。ちなみにタツシエとは、今のドイツ語である言語で『ポケット』という意味の言葉。物を隠す秘密の倉庫、ということだ。

「あるんだよ…これから。」

「では博士、例のものを用意してくれ。」

「へいへい。」

彼の命令とやらで、ポルターガイストはなにやら大きな機械を運んできた。一同は、それに興味津々だ。

「これは…1週間ほど前、この天才の私が発明した、超音波発生装置である。」

「超音波？なんだいそれ？」

見知らぬ言葉に、一斉に質問があがってきた。うるさくなってきたところをステイツフマンが静止し、博士は説明を続けた。

「簡単に言えば…それに当たると、意識を失うんだ。」

「なんだって？じゃあ…それって最強の兵器じゃないのか？」

ある男の言葉から始まり、歓声が響いた。だが、ポルターガイストは暗い表情で言った。

「いや、そういう使い方は出来ない。…元態のサイエンサーには通用しないんだ。なんでも脳の周波数とかいっているので相性が悪くてな。」

それを聞き、期待を裏切られたのか、ブーイングの嵐に。

「まあまあ、落ち着け。ちゃんと人間には効くんだ。」

「…意味ねえじゃんかよ！！自爆行為だぞ！！」

「…あ、そうか。」

彼は手をポンと叩いた。見ていたステイツフマンは、ため息をもらす。そして、説明を続けてくれ、と彼に言ってやった。

「で、この超音波には二種類あつてな。先ほど挙げた『意識をなくさせる』というのと、それに…『記憶を消し去る』というのだ。」

「…両方利用価値がないようだな…。」

「ああ。だが、発明したことに変わりはない。」

彼は誇らしげに負け惜しみを言った。

「後者の方は、周波数等を微調整することで一定期間の記憶を消したり、特定の『ものや人』についての記憶を抹消できるんだ。そして…2種類の超音波はかなり長く響くという性質を持っていて、一度発生させると地球上の全ての地域に行き渡るほどだ。」

あまり機械のことに詳しくない村人は、このへんからボーっとしている。

「…最後に、この超音波は磁力により人体への影響を妨げることができる、と言つてこつ。以上で説明会は終わりだ。」

「…で、それがなんだつてんだ？」

「使用するに決まつているだろう。」

ステイツフマンは割り込んできた。そして、彼は重い口を開く。

「驚かないで聞いてくれ。我々は…世界から怪物の存在を隠すのだ。」

「…永遠にな。」

## 第十八話 その名はG

「はあ？」

村人たちは騒然とした。それを納得させるように、ステイツマンは付け加える。

「怪物、それと…古代文明についての記憶を、人間から抹消する。むろん、全ての人から忘れさせるのではなく…ここにいる何十名かと、全世界の各村にいる数名には、それを免れてもらう。」

「…いろいろ混乱しているのだが…ちよつと言わせてもらうぞ。…そんなこと…出来るのか？」

「機械は、既に稼働準備を済ませてある。あとはボタンを押すのみ。サイエンサーの動きも大きく利用できたよ。おかげで、文明の足跡がなにもかも消え去った。残っているのは、ここと各村のタツシエのみだ。これが成功した暁には、人間はなにもかも覚えておらず、技術さえ消え去り、また新たな文明を築き上げていく事になるだろう。」

だが、やはりまだ戸惑いを隠せない村人たち。一人の若い男が尋ねた。

「でも…一体、なんのためにそんな…コストのかかることをするのですか？」

「理由ならある。」

彼は一步前へ足を出し、言った。

「これから先…人間はどんどん発達していく。子孫も増える事だろう。だが…その中で…怪物への対抗意識を持つものがいたら、どうする？もしその者が、独断で怪物共を攻撃、そして怪物の方が反逆にでも出たら…大変な事態になるだろう。…この戦いのことは、あまり知らない方がいいのだ。その方が…人間は豊かに暮らしていける。世界から、少しでも争いを無くすのだ。」

「セロファン様、なんの御用で？」

数カ月後のことである。セロファンの側近であるカリウマンは、いつからか工房に入ったつきり姿を現さないその首領に、突然呼び出されたのだ。

「ああ、よく来たな。こつちに来てくれ。」

滅多に訪れた事のない彼の工房は、やけに暗かった。真っ黒、といつてもいい。セロファンの姿でさえ、シルエットこそはつきりしているものなにを着ているかなどはまったく見当がつかないほど。それもそのはず、地下につくられた即席のものなのだ。

「カリウマン、私は信じているよ。」

「…何をですか？」

「君をだ。私の一番の…部下だからな。」

以前、失ってしまった最高の部下にも同じような事を言ったな、とセロファンは内心思い出していた。

「これから見せるもの、そして言う事は…私と君だけの秘密だ。そして…私の命令に従ってくれることを願っている。」

そう言つて、セロファンは壁のスイッチに手を近づけた。ライトのスイッチだったらしく、工房内に明かりが灯った。だが、そこにあったのは、とてつもなく大きな、巨人だったのだ。

「セ、セロファン様、こ、これは…」

「大きさに驚いているのか？そんなはずはないだろう。ブロッケン・モンスター、人間の間ではサイエンサーとか呼ばれている君たちが『巨大化』という能力を使ったときと、ほぼ同じ大きさだが。君の想像と一致しているだろうが…操縦タイプの最強ロボットメカだ。」

それでも、常識的に考えても、事実を述べるとしても、カリウマンはただ口を大きく開けて啞然としているだけだった。セロファンはそれを見て、笑いながら説明を شدした。

「『growing gigas of the ghost gate』。」  
「へ？」

「『幽霊門の成長する巨人』だな。巨人は見たまま。幽霊門とはすなわち、『生』の世界と『死』の世界をつなぐ境目のことだ。つまりこの巨人は『生』を『死』に変換することができるという訳だ。そして成長する…これから、受け渡されることになるだろう人間によって、どんどん性能がよくなっていく、ということを表している。」

「…『人間』？セロファン様、まさか…」

「そのまさかだ。やっと空気が読めたか？」

状況を察し、彼は再度啞然とした。

「私は…人間に加勢する。ただ、それだけだ。もうこのなんの意味の無い過ごし方はこりごりなのだよ。だから…資源をこのような形で利用したのだ。対サイエンサー用超兵器、『超機動要塞ガギグゴ』の製作、として。」

そのネーミングセンスはさておき、心の大きな変動を確認しているが、今の自分の立場をよく理解した上で、カリウマンはなおも疑問を抱いていた。

「…失礼ですが…我々への加勢、も出来たのではないのでしょうか？変態能力を使えば、操る者はどちらでも同じのはず…それに、セロファン様の技術があれば…対人間兵器、として開発することも可能だったのでは？」

「ああ、たしかにそうだ。後からよくよく考えてみると、どちらを犠牲にしても都合が悪くはならない、ということに気付いた。もちろん、再改造なんて簡単なものだ。」

「ではなぜ…」

「私は人間なのだよ。」

納得したのか、その精神に恐怖を怯えたのか、それっきりカリウマンは口を開かない。頼りになるのは、何を言われようと自分はセ

ロファンに信頼されている、という事実のみ。

「で、一つ頼みたい事がある。こいつのテストをしてもらいたいのだ。さすがに私がそれを行う訳にはいかないからな。君の人は、その強い奉公心故に私を選んだのだったな？その姿で、ガギグゲゴに乗ってほしい。マニュアルはここにある。…頼んだぞ、私の最高の部下よ。」

セロファンがカリウマンを信じていたように、カリウマンも彼を信じていた。そして、彼はそれを手にしたのだった。

「では、これより10分後：計画を決行する。」

同じ頃、セロファンがいるモンスターの基地から2kmもない地点で、またしても謎の会議が。

「『暗殺』といっても、強襲しその息の根を止めるだけだ。行うのは、私を含めるこのあたり一帯から集めたより選りの悪性ブロケン・モンスターたちだ。成功する確率が高いだろう。」

「危険ということに変わりはないがな。」

別のサイエンサーが、嫌味のように付け加える。

「まあいい。あの、自分勝手な老人に：ブロッケン・モンスターの力というものを思い知らせてやるのだ。」

だが、その背後に一人の男がいることなど知る由も無かった…。

「なんてこった…こんなこと聞いてないぞ！」

そう、その男こそ、異次元から来たしセロファン・フリーザンだった。

もうそろそろ、例の大チャンスが訪れる頃だと思い、何週間か前から村を離れ今で言う東京に向かって最中であった。その中で偶然なにやら怪しい集団を見つけ、こっそり立ち聞きをしていたところ、この有様だ。

「私のところに刺客、か…無事対処できればいいが…。」  
しかし、サイエンサーたちの会議の内容を聞いた限り、その可能性は高いとはいえない。

「じゃあ…また…私に運命を変えろと？」

半信半疑で断言するゼロファン。今回ばかりは、いろいろと厄介なことになりそうだ。

「…運に賭けるしかないのか…全てが上手くいってくれれば、阻止する事ができる。だが…失敗したら…その時は最後だ。一応、覚悟はしておこう。」

今の自分は、運命の食い違いによる自身の消滅か、なにもかもが問題なく終わり無事未来への帰還、という絶望と希望の瀬戸際にいるのだなと改めて思った。

「人間、誰もやらなければならぬことがある。それが現実から逃亡したいものでも…自分を信じて実行する。全ては結果だ。だから…私はやる。なんとしてでも。」

その時、怪物の大群が突如出現した。目標は、サイエンサーの本拠地である基地だ。その基地からはまだその大群が確認できていない。しかしそれに対抗するかのように、そこには赤黒の謎のビークル状の物体が存在してあった。おそらく、説明はしてなかったがガギゲゴの『可変機能』を使った結果だろう。むろん、この機体の存在理由はテストであり、出現したサイエンサーに立ち向かうためではない。偶然の立ち合わせである。

ガギゲゴのパイロットに選ばれた、一人の怪物がコックピットに乗り込もうとしたその時だった。目の前に現われたのは…。

「…ゼロファン様!？」

## 第十九話 最後の試練

「カリウマン、早くそこをどけ!!」

普通に考えるとありえるはずがないのだが、一人の老人は、まぎれもなく真正銘本物のセロファンだった。それもそのはず、見た目がそうであるからだ。もしかしたら、自分と同じ怪物の内の誰かが変態している可能性もあるが、本物が偽者か、自分自身が怪物だということもありなんとなく分かる。むろん、実を言うとこのセロファンは本物といえば本物だ。

「で、ですが、セロファン様は私にこの巨人のテストをしると…」

「私の命令が聞けないというのか!?!」

「そうではありませんが…」

動揺を見せながら、従うがままに彼は後退し、セロファンの方がコックピットへと向かっていく。

「カリウマン、一つ命令しておく…早く、できるだけ遠くへ行け!!」

「え、え?今、なんと?」

「いいから早く…ここから離れるんだ!!そして二度と戻ってくるな!!走れ、カリウマン!!君は…私の命令に従う、いい部下じゃないか!!」

セロファンの言動に多少の違和感があるものの、その命令を出しているのは自分の君主、仕方なくカリウマンは走り去って行った。

「まったく…私はなんて悪運の強い男だ。」

言うまでもなく、ガギゲゴの操縦席へと入っていった男は、基地で頼もしき部下からの報告を首を長くして待っているセロファンとは別の、『もう一人の』セロファンである。

「昔から着ている服装が変わっていないのがせめてもの救いだ。そうでなければ勘付かれていたところだ。」

そういつている間にも、彼の手はガギグゲゴの起動スイッチに近づいていった。

「さすが新品だ。シートの匂いも乗った感じも、今とはまるで違うな。こいつに乗るのは、何年ぶりだろう。」

そういえば、最近乗ったのはここへタイムスリップした時、たしかゴッド・ガギグゲゴだったな、とセロファンはなんとなく思い出した。そして、そこから話を発展させる。

「…アメシストからの逃亡というくだらない希望から、こんな大冒険への発展か…今思えば、本当に大変なことを繰り返してきたな…もし、その途中で死んでいたとしても…いや、今から死ぬ運命にあるとしても…これだけは変わらない。」

思い切つて、彼は小さく呟いた。

「私は夢を叶えた男なのだ。」

彼はそう言った後、すぐにガギグゲゴを起動させた。真新しいスイッチを操作し、戦闘形態に変形させた。敵は、無数のサイエサー。だが、その敵に打ち勝つ自信は、大いにあった。

「超機動要塞、ガギグゲゴ!!」

作つた後間もないからなのか、ガギグゲゴは非常に動かしづらかった。変形は難なく済んだ。しかし、その後の動きに違和感を感じたのであった。

「ものには慣れ、また、慣れられるのが大事、ということか…。」

だが、背に腹は変えられない。地平線の向こうから見えてきた敵の数は、それを無視しなければ倒す事はできないものだった。

「早めに事を済ませねば…」

セロファンは早速、ガギグゲゴの腕を曲げ、Gブラストの発射体勢に入る。

「できるだけまとまってくれていれば倒しやすいのだがな。にして

も…この機械の巨人に打ち勝つ手立ては存在しないだろう。」  
むろん、相手側も目の前に聳え立つ謎のメカに驚いている様子。しかし、望みを捨てずに突進を続ける。基地、そしてガギグゴとの距離がどんどん近づいていく。こちらが巨人ならあちらも同じく巨人、そのスピードは速かった。それでも構わず、まずは脅威とやらを見せてやろう、と思い、先頭をきっているリーダー格の怪物にGブラストを発射しようとした、その時だった。

「…ん…不発だ?!？」

そう、不発だった。

「なぜだ!?故障などありえん!!!…待てよ…ま、まさか…」

思い当たるその『理由』を確かめるべく、コックピット内にある様々な機械器具に目を通す。

すると、その予想は的中した。いや、的中してしまっただのだ。

「エネルギー不足…だと…しまった…やってしまった…。」

ガギグゴというこの馬鹿でかい可変ロボのエネルギー源は、エナジーロックなる部品の『太陽電池』の働きから誕生する電流である。だが、創られた工房は太陽光の全く当たらない地下室。それでいて、つい数十分前出されたばかりだ。ちなみに、運悪くこの日の天候は快晴とは言えない曇りの寸前の天気だ。それをふまえるとすると、いくらその太陽電池の能力が高いとしても、多少は移動するためのエネルギーを予め蓄えておいたとしても、ほぼ空っぽのバッテリーからの充電、変形は可能でもGブラストという必殺技が出せるはずが無い。

「…大丈夫だ…手はある!!!」

そう言うと、セロファンはあるスイッチに手をかけた。すると、基地のほうから建物の崩壊音が聞こえてきた。それは、基地の壁を突き破って出てきたGデメウスとGゼウス。また後でテストをする予定で、まだカリウマンには説明していなかったガギグゴのサポートメカであり、同時に機体を最強形態へパワーアップするために必要な機体だ。

「電気エネルギーがだめなら、私の体から生命エネルギーを奪うがいい!!」

問題解決を確信し、セロファンはアシステイングを決行した。全てが自動的に進んでいく。サイエンサーが手に届くまで近づくのは時間の問題だ。しかし、運よくそれは間にあった。

「無敵機動要塞、ゴッド・ガギグゲゴ!!」

正体不明の巨人が見せた、新たな変化。これにはサイエンサー側の驚きもいつそう激しくなり、それは彼らを一步後退させるまでに至った。一体なんなのか分からない以上、うかつに攻撃することができない。矛盾が生じる推測だが、人間の開発した新兵器の可能性も否定できない。

「ど、どうした…早く行かないか!!」

計画の発案者であるリーダーは呼びかけたが、警戒心からか皆の衆は動こうとしなかった。

「ええい、まだなのか!!」

アシステイング終了後もなお、ガギグゲゴの動きはぎこちない。

「まだ…エネルギーが足りないとしてもいいのか!!」

密着したシートから、自分の体力が蝕まれていくのは大きく感じている。しかし、ガギグゲゴのエネルギー貯蔵のメーターは満タンから非常にかき離れている。

「このままでは、やつらが…」

モニターから見えるのは、一度は動きを止めたがその内の一人が再び足を動かし始めた、サイエンサーの大群。さつきよりその速度は上昇しているのを確認した。もう時間がない。

セロファンは、少ない時間を使ってひたすら考えた。そして、一つ、案を思いついた。

「…こうなつたら…やるしかない。やりたくはないが…あの方法を使うのだ。諦めるわけには…いかん!!」

「もうちょいだ…待っていたぞこの時を!!セロファン・フリーザン、その首をこの手に収める瞬間を!!…!?!」

灰色の怪物が、大きくジャンプをしたその時。赤黒の巨人がある方向から、これまた巨大な光が発射されたのだ。彼はその光に撃たれ、跡形もなく消滅した。光は太く、そして長く、後方のサイエンサー群にまで影響を及ぼした。間一髪光との接触がなかったサイエンサーたちも、それを見て恐怖を覚え、退却するしかなかった。

約1分後。ガギグゴの充電が不十分であったことを思い出し、伝えなければならぬと危険を承知で基地の外に出たもう一人のセロファンは、そこで思わぬ光景を目にする。

「…な、なぜゴッド・ガギグゴがあるのだ…そうだ、カリウマンは!?!」

なにが起こつたのか全く分からなかったが、ひとまずは一番重要なこと、大切な部下の様子を確認しようとした。だが…。

「カ、カリウマン!!どうなっているんだ!?!」

コックピットに座る自分の形をした物体、すなわち自分に変態したカリウマンは、予想以上にぐったりとしていた。セロファンはその理由を追求すべく、装置を探索した。すると…。

「なんと…ミスだ…!生命エネルギー吸収のレベルが…最大になっている…!!」

第二十話（最終話） 時は無限に、永遠に

彼は、またしても過ちを犯してしまったようだ。なぜゴッド・ガグゲゴがそこに存在してあるのか、という謎のことより、今、自分のせいでまたしても最愛の部下を失ってしまったという事実の方が、よっぽど大切であり、心を強く打ちつける鋼の釘であった。

「きつと…製作時にこの設定を間違えてセットしてしまったのだ…そしてそれが今…クツ…!!」

カリウマンはピクリとも動かない。すでに息絶えているのだろう。「カリウマン…私を許してくれ…。こんな…こんなはずではなかった。全て…私のせいなのだ…。…もう…この失敗は繰り返さん!!」そう強く言うと、彼は立ち上がり基地へと戻って行った。自分の生み出した子供たちの元へ。空中に突如出現した暗黒の穴とその吸引作用、そして、巨人の頭部からたまたたと歩んでいく一人の老人の姿に、気付くことなどなく。

「これを…土に埋めると?」

カリウマンより劣ってはいるものの、極秘情報を漏らす者として値する怪物など、他にいない訳が無かった。だが、彼が一番の部下であることに変わりはない。この事態も予想外の出来事であり、元々彼らにそのことを伝えるというのは計画に入っていなかった。

「できるだけ早く、私の目に入らないようにしてくれ。…それが終わり次第、報告しろ。」

「了解しました。」

この時のセロファンにとって一番の願いは、出来るだけ早くこの悲劇を忘れたい、ということだった。だから、数時間後になって後処理を担当させた一人のブロッケン・モンスターから「カリウマンの遺体がありません。」との重要そうな真実を知らされた時も、まだ悲しみに打ち勝つ事ができず彼の言う事に見向きもしなかった。

「人間にも…感情というものがある。これ以上、カリウマンと同じような運命にあつてほしくない…悲しんでほしくない。かといって…順調に進んできた計画を途中で諦めるわけにはいかん。きつと、カリウマンもそれを望んでいるはずだ。だから…せめて、ゴッド・ガギグゲゴだけは隠し、二度と使用できなくするのみだ。」

それがゼロファンの意図だ。また、なぜ土に埋めるのみで『壊す』という一番確実な行為を選ばなかったのか、という点については、それでも彼は悪党、欲深い人間なのだ、ということだ。

そして、彼がするべき使命は、まだ一つ残っていた。

「…な、なんだありや…」

人間の村に出現した、謎の巨人。金属でできているようで、『機械人形』とも呼べそうだ。その巨人の足元に、顔を隠す一人の老人がいた。村人に色々と尋ねられると、小さく答える。

「私が開発した、兵器とやらだ。君たちで自由に使ってくれたまえ。名前？私の名は…そうだな…『バンクーバ・ハンバーガー』とでも言うっておこう。」

「ぐあああああああああ…」

とてつもなく暗い空間を、かすかな光を頼りに泳ぐように進んでいく。単純そうに見えるが、いざやろうと思つと案外難しいものである。すると、その老人は、一つの穴に目をつけてそこへと近づいた。一分もすると穴は大きくなった。老人は勢いよくそこへ飛び込んだ。その先の場所に、思いをこめて。

「うつ…」

200X年、某都市市役所前。エルビウマンの攻撃を食い止めたゴッド・ガギグゲゴのGバスターの先には、もやもやとつずまく空

間と空間の歪みによって生まれし、『異次元』というものが存在していた。その空間からある老人が飛び降りてすぐに、それは閉じ、この世から消え去った。そしてこの老人こそ、悪党ゼロファンである。

「くそ…とんだ誤算だったようだ…。覚悟は決めていたが…これほどのものとはな…。」

彼の今の健康状態は、死に直面していると言ってもおかしくは無い。ゴッド・ガギゲゴからの大量の生命エネルギー吸収。これのせいであった。だが、倒れそうになりながらも、彼の足はある場所へと向いていた。そこは、太陽に照らされて眩く輝いている、ガギゲゴのコックピットだ。ゼロファンは、自分の死に場所として最も相応しいものを選んだのだ。

「なんとか…目的は果たせた…。今の状態がなんであれ…無事…戻ってこれたのだ…。」

一歩、また一歩と、彼の足は倒れこむ機体の頭部へと進んでいく。そして、たどり着くことが出来た。コックピットに入り、ゆっくりとシートに腰掛ける。現実時間と言うとすれば、自分が凶暴な怪物を始末してからまだ数分と経っていない。まだシートに温もりが残っていた。

「今度こそ…終わるようだな…。」

何も映っていないモニターを、ただなんとなく見つめる。なぜだかこの時になって、まともに言葉を話す気力だけは湧いてきた。それを無駄にはできない。

「今思い出すと…永い人生だったものだ。」

今までにあつた様々な出会い、別れ、発見、失敗、そして成功を頭に思い描いた。その中で、三人の男の姿を確認できた。一人は、信じていたのにも関わらず、その真意は『裏切り』だったと発覚した最初の部下、ヴィファリアス。もう一人は、最強にして最高のライバルでもあつた少年、山田次郎。もしかしたら、ゼロファンの人生を一番大きく歪めたのは彼かもしれない。そんな彼に勝つことが

出来なかつた原因のひとつは、彼が真の『勇氣』、そして『正義』というものを持っていたからだろう。最後の一人は…。

「ノア：お前は、私に大切な事を教えてくれたのだな。全ては…結果ではないと。お前は何も望んではいなかった。ただ…精一杯努力をしたのだ。それが報われず、あのような結末になつてしまつても…決してそれを悔やまなかつた。改めて言つておくぞ…ありがとう…！！」

セロファンは目をつぶつた。その一生に後悔はないと、強く信じながら。

「あれから1週間か…」

バンクバー・ハンバーガーと名乗る老人がガギゲゴなるロボットを受け渡しに来た。だがその行為はありがたいものの、肝心の製作者であるその老人が再び姿を現す様子は無い。

「サイエンサーを倒すための有効な兵器だと言つてたが、これじゃ操れないぞ。」

「大丈夫だ。既に対策は練つてある。」

「対策？」

「部下に助つ人を呼ばせた。もうすぐ来るはずなのだが…」

その時、遠くの方から一人の男が現われた。青っぽい衣服を身にまとつているが、影になつていて顔はよく見えない。だが、『若い』と言えることは確かだ。しかし、なにか悪い予感がする。すると、その人物を見て、二人は啞然とした。

「やあ、話は聞いたぜ。はじめましてだな、大佐さん。俺はゴツプという…すごい技師だ。」

なぜか、二人はがっくりとする。それを不思議そうに見るゴツプ。「おいおい、俺じゃだめなのか？地元じゃあ機械の解体・及び分析の技術の高さを評価され『青い水星』の異名がつけられているほど

だぞ。」

「その解体した機械を元に戻す事ができず、資源の無駄ばかりしている『永遠に厄介者』というのも耳にしたのだがな。」

「そ、そんなのでたらめだ。ただの噂にすぎない。ああ、本当だとも。」

しかし、今更この男を帰すというのは、わざわざ北の遠い方から来てもらったのだからいくらなんでも申し分ない。仕方なく、ステイツマンは説明に入る。

「今後の我々、人間の未来予想図を見ていくと、どうもこのガギグゴとやらが必要不可欠になってくる。それも、大量にな。だから…その、君にだな、ガギグゴをよく調べてほしいのだが…引き受けて…くれる…よな？」

ためらいながら頼むステイツマンに対し、ゴツプは軽く答えた。「その通りだ。」

「たった今、セロファンの一生が終わりました。」

「そうか…ようやく、だな。」

200X年の冥界。セロファンの死を確認し、ホツとしたところで神は呟いた。

「人の一生とは、長いようで短いものだ。その期間の中で人は自分の歩む『道』を探す。ある者はその道を曲がることなく進み、目標へ到達する。そしてある者は、途中でくじけ、諦め…挫折する。…むろん、努力を続けたからといって、絶対に成功へと導かれるかどうかは話は別だ。」

一度言い切ると、先ほど教えられたある男に話題を逸らした。

「この男の名は、裏世界の歴史に残される事になるだろうな。何を欲していたにせよ…事実なのだから。夢を叶えた男…『最強の悪党、セロファン・フリーザン』として…永遠に。」

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9797d/>

超リアルロボットストーリー 超機動要塞ガギゲゴS.O.B.

2009年3月27日06時04分発行